

# 揚殿遺跡

中山間地域総合整備事業 沖永良部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011年3月

鹿児島県知名町教育委員会

## 序 文

この報告書は、中山間地域総合整備事業 沖永良部地区に伴い、平成 18 年度・平成 20 年度・平成 21 年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

本遺跡は、縄文時代終わり頃から古代・中世の時期の遺跡で、土器や石器・陶器などの遺物が出土しました。特に、これまで本島において出土例が少ない 9 世紀前後の土器が確認されたことは、その時期の沖永良部島の様相を解明する貴重な資料となることでしょう。

この報告により、多くの方々が遺跡や文化財について理解を深め、本島の歴史や文化について活発な意見が交わされることを期待いたします。

最後に、調査から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力くださいました鹿児島県教育庁文化財課・ご指導並び玉稿を賜りました諸先生方、発掘調査や整理作業に従事された皆様、調査にご配慮くださいました沖永良部事務所農村整備課、その他関係各位に深く感謝申し上げます。

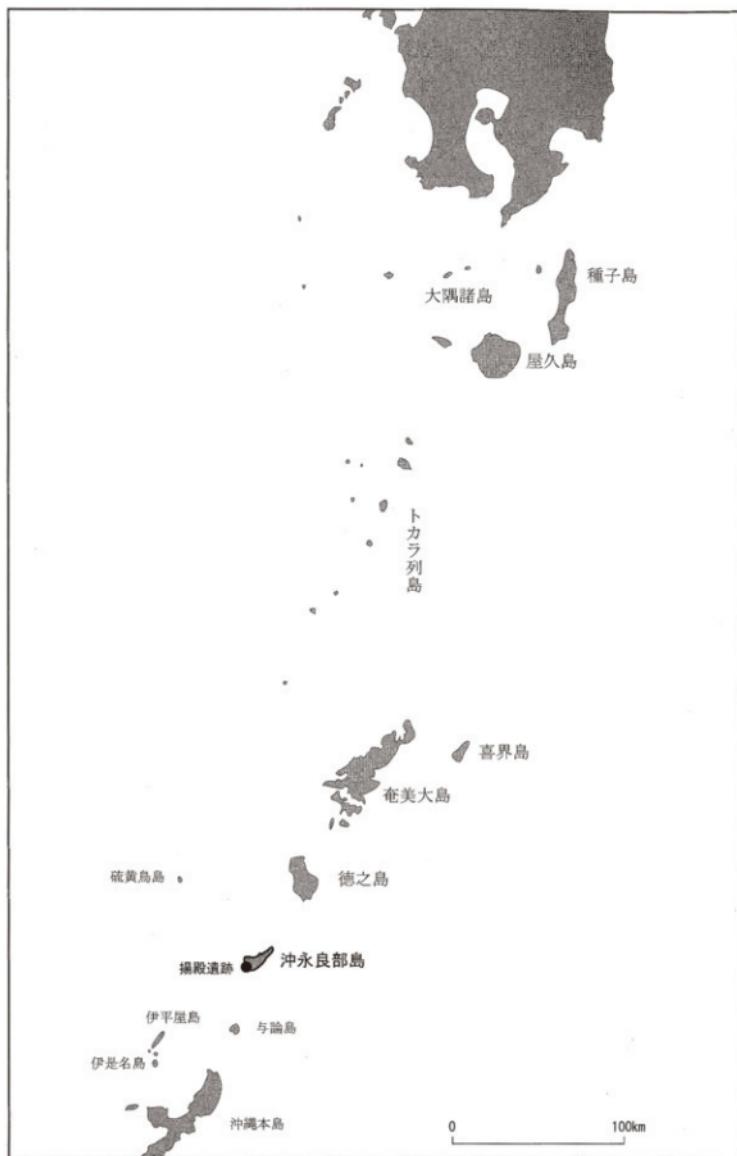
平成 23 年 3 月

知名町教育委員会

教育長 大山 修

報告書抄録

ふりがな	あげどのはいせき							
書名	揚殿遺跡							
副書名	中山間地域総合整備事業 沖永良部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	知名町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	(12)							
編著者名	森田太樹 鼎 丈太郎							
編集機関	知名町教育委員会							
所在地	〒891-9295 鹿児島県大島郡知名町知名307番地 Tel.0997-93-3111							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 經	調査期間	調査 面積 m <sup>2</sup>	調査 原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
揚殿遺跡	鹿児島県 大島郡知名町 屋子母字揚殿	465348	95-75	27° 33' 73"	128° 55' 47"	2006.9.3 ~2006.9.4  2007.3.14 ~2007.3.19  2009.3.4 ~2009.3.24 2009.7.6 ~2009.9.7	1,224	農業 関連
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
揚殿遺跡	散布地	縄文時代後期 縄文時代晚期 古代 中世	ピット49基 掘立柱建物跡	嘉徳II式土器 宇宿上層式土器 仲原式土器 兼久式土器 カムイヤキ 滑石混入土器 磨石・蔽石 砥石・石斧				



第1図 沖永良部島知名町揚殿遺跡の位置

## 例　　言

1 本書は、大島支庁から委託を受け平成18年度・平成20年度・平成21年度に実施した中山間地域総合整備事業神永良部地区内の埋蔵文化財試掘・確認調査・本調査の報告書である。

2 発掘調査は、知名町教育委員会が主体となり、鹿児島県教育庁文化財課の協力を得た。

3 本書で用いたレベル高は海拔を表し、方位は磁北を示す。

4 遺物は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。

5 本書の執筆は次のとおりである。

第1章～第4章・第5章 第2節：森田太樹

第5章 第1節：鼎 丈太郎（瀬戸内町教育委員会）

6 現地調査に関する実測及び写真撮影は、森田が行った。遺物の実測・トレース・拓本は、森田・白石・今村が行い、和泊町教育委員会の支援・助言を得た。出土遺物の写真撮影は、森田・今村が行った。石器の実測は、株式会社 九州文化財研究所に委託した。

7 調査・報告書作成にあたっては、次の方々にご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

伊藤慎二 鼎 丈太郎 鐘ヶ江賛二 北野坂重郎 境谷牧子 新里亮人 新里貴之 長野真一

永吉由美子 新納忠人 野間口 勇 平 美典 前利 潔 馬籠亮道 松尾栄次郎 宮城弘樹

本 鮎子

8 本書の編集は、森田が行った。

9 出土遺物は、知名町教育委員会が知名町中央公民館に保管・展示する予定である。

## 目 次

序文	
報告書抄録	
例言	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の概要と経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の位置及び地理的環境	4
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	4
第3章 揭殿遺跡・泊り原遺跡・ヤイント遺跡の試掘・確認調査	
第1節 調査の概要	10
第2節 試掘・確認調査の結果	10
1. 揭殿遺跡	10
2. 泊り原遺跡	10
3. ヤイント遺跡	10
第4章 揭殿遺跡の本調査	
第1節 調査の概要	14
第2節 調査区A	14
1. 調査の概要	14
2. 基本層序	14
3. 遭構	14
第3節 調査区B	16
1. 調査の概要	16
2. 基本層序	16
3. 遭構	16
第4節 調査区C	17
1. 調査の概要	17
2. 基本層序	17
3. 出土遺物の分類	17
4. 遭構	23
5. 遺物	24
第5章 総括	
第1節 揭殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置づけ (鼎 丈太郎)	51
第2節 調査のまとめ	62
図版	

## 挿図目次

第1図 沖永良部島知名町揚殿遺跡の位置	(3)
第2図 周辺の遺跡	7
第3図 揚殿遺跡・泊り原遺跡試掘確認調査トレンチ位置図	11
第4図 ヤイント遺跡確認調査トレンチ位置図	12
第5図 調査区 A 遺構配置図	15
第6図 土坑1	15
第7図 土坑2	15
第8図 調査区 B 遺構配置図	16
第9図 調査区 C グリッド配置図	18
第10図 調査区 C 土層断面図	19
第11図 土器分類図	21
第12図 調査区 C 遺構配置図	22
第13図 挖立柱建物跡	23
第14図 第1文化層出土土器等	25
第15図 第1文化層出土石器	26
第16図 第2文化層出土土器（1）	29
第17図 第2文化層出土土器（2）	30
第18図 第2文化層出土土器（3）	31
第19図 第2文化層出土土器（4）	32
第20図 第2文化層出土土器（5）	33
第21図 第2文化層出土土器（6）	35
第22図 第2文化層出土土器（7）	36
第23図 第2文化層出土土器（8）	37
第24図 第2文化層出土土器（9）	38
第25図 第2文化層出土土器（10）	39
第26図 第2文化層出土石器（1）	40
第27図 第2文化層出土石器（2）	41
第28図 第2文化層出土鉄製品	42
第29図 奄美諸島における在地土器変遷図	54
第30図 沖縄諸島土器編年 貝塚後期前葉(末) —後葉(弥生後期後半—平安併行)・土製品	57
第31図 砂丘形成と長浜金久遺跡群・ ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図	58
第32図 沖縄後期の遺跡立地	59

## 表目次

第1表 知名町遺跡地名表	8
第2表 試掘確認調査結果一覧表	13
第3表 第1文化層出土土器・カムィヤキ・陶器観察表	27
第4表 第1文化層出土石器計測表	27
第5表 第2文化層出土土器観察表	43
第6表 第2文化層出土石器計測表	48
第7表 第2文化層出土鉄製品計測表	48
第8表 揚殿遺跡検出脊椎動物骨一覧表	49
第9表 揚殿遺跡検出貝類遺体一覧表	50
第10表 出土土器等集計表	66
第11表 出土石器集計表	66
図版目次	
図版1 揚殿遺跡周辺空中写真	(67)
図版2 遺跡周辺の環境	(68)
①屋子母海岸	
②屋子母海岸の湧水	
③湧水（ウクヌホー）	
④浜倉	
⑤与論・沖縄を望む	
図版3 発掘・整理作業	(69)
①表土剥ぎ状況	
②機材使用状況	
③整理作業状況	
④発掘調査状況	
図版4 泊り原遺跡・ヤイント遺跡近景	(70)
①泊り原遺跡近景	
②ヤイント遺跡近景	
図版5 調査区 A	(71)
①調査区 A 近景	
②遺構検出状況	
③土坑1	
④土坑2	
⑤調査区 A 完掘状況	
図版6 調査区 B	(72)
①調査区 B 遺構検出状況	

②ピット掘り下げ状況	図版 16 .....	(82)	
図版 7 調査区 C (1) .....	(73)	第2文化層出土土器 (10) 第2文化層出土土器 (11)	
①調査区 C 近景		図版 17 .....	(83)
②第1文化層遺物出土状況		第2文化層出土土器 (12) 第2文化層出土土器 (13)	
③ピット検出状況 (C3)		図版 18 .....	(84)
④ピット検出状況 (A3・B3)		石器 (1) 石器 (2)	
⑤ピット検出状況		図版 19 .....	(85)
図版 8 調査区 C (2) .....	(74)	石器 (3) 石器 (4)	
①第2文化層遺物出土状況		図版 20 .....	(86)
②土器出土状況		鉄製品 脊椎動物遺体	
③獸骨出土状況		図版 21 .....	(87)
④土器出土状況		貝類遺体 (1) 貝類遺体 (2)	
⑤調査区 C 先掘状況		図版 22 .....	(88)
図版 9 調査区 C (3) .....	(75)	貝類遺体 (3) 貝類遺体 (4)	
①土層断面 (C3 北)			
②土層断面 (C3 東)			
③発掘作業員			
図版 10 .....	(76)		
第1文化層出土土器 (1)			
第1文化層出土土器 (2)			
図版 11 .....	(77)		
第1文化層出土滑石混入土器・カムィヤキ・陶器			
第2文化層出土土器 (1)			
図版 12 .....	(78)		
第2文化層出土土器 (2)			
第2文化層出土土器 (3)			
図版 13 .....	(79)		
第2文化層出土土器 (4)			
第2文化層出土土器 (5)			
図版 14 .....	(80)		
第2文化層出土土器 (6)			
第2文化層出土土器 (7)			
図版 15 .....	(81)		
第2文化層出土土器 (8)			
第2文化層出土土器 (9)			

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

鹿児島県農政部農地整備課（沖永良部事務所農村整備課、以下県農政部）は、沖永良部地区において県営中山間地域総合整備事業を計画し、地区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。過去の分布調査並びに平成16年度に実施された分布調査により知名町屋子母地内に揚殿遺跡・泊り原遺跡・ヤイント遺跡が存在することが確認された。平成17年度に試掘調査、平成18年度には遺跡の範囲・性格等を把握するための確認調査を実施し、揚殿遺跡が残存することが確認された。調査結果に基づき、盛土工法等による遺跡の保存について協議を行った結果、現地保存は困難であったため平成20年度・21年度に記録保存のための本調査を実施した。整理作業・報告書作成は平成21年度・平成22年度に実施した。

### 第2節 調査の組織

#### 〈平成17年度 試掘調査〉

事業主体	鹿児島県農政部農地整備課（沖永良部事務所土地改良課）
調査主体	鹿児島県教育庁文化財課
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課 課長補佐 神田忠男 鹿児島県教育庁文化財課文化財主事 堂込秀人 知名町教育委員会生涯学習課主事 森田太樹

#### 〈平成18年度 確認調査〉

事業主体	鹿児島県農政部農地整備課（沖永良部事務所農村整備課）
調査主体	知名町教育委員会
調査責任者	知名町教育委員会教育長 大山修
調査事務担当	知名町教育委員会生涯学習課長 林富義志
調査担当	知名町教育委員会生涯学習課主事 森田太樹
作業員	知名町シルバー人材センター・林未幸

#### 〈平成20年度 本調査〉

事業主体	知名町教育委員会
調査主体	知名町教育委員会
調査責任者	知名町教育委員会教育長 大山修
調査事務担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課長 林富義志

調査担当 知名町教育委員会事務局生涯学習課 森田太樹  
作業員 知名町シルバー人材センター・木下光・西田安大・森ユキエ・新納美保

〈平成21年度 本調査・整理作業・報告書作成〉

事業主体 鹿児島県農政部農地整備課（沖永良部事務所農村整備課）  
調査主体 知名町教育委員会  
調査責任者 知名町教育委員会教育長 大山修  
調査事務担当 知名町教育委員会事務局生涯学習課長 林富義志  
調査担当 知名町教育委員会事務局生涯学習課主事 森田太樹  
作業員 知名町シルバー人材センター・吉松秀一・前田与吉・川畠元勝・村山大志  
森ユキエ

〈平成22年度 整理作業・報告書作成〉

事業主体 鹿児島県農政部農地整備課（沖永良部事務所農村整備課）  
調査主体 知名町教育委員会  
調査責任者 知名町教育委員会教育長 大山修  
調査事務担当 知名町教育委員会事務局生涯学習課長 樺憲次  
調査担当 知名町教育委員会事務局生涯学習課主事 森田太樹  
遺物指導瀬戸内町教育委員会 鼎丈太郎  
作業員 白石重樹・今村委代

### 第3節 調査の概要と経過

〈平成17年度〉

調査期間 3月27日

揚殿遺跡36～39トレンチの調査

〈平成18年度〉

調査期間 9月3日（日）～9月4日（月）・3月14日（水）～3月19日（月）

9月3日（日）～9月4日（月）

揚殿遺跡6トレンチ～9トレンチ・15トレンチ～19トレンチの調査

3月14日（水）～3月19日（月）

揚殿遺跡1トレンチ～5トレンチ・10トレンチ～14トレンチ・20トレンチ～35トレンチの調査。泊り原遺跡1トレンチ～5トレンチ、ヤイント遺跡1トレンチ～2トレンチの調査

〈平成20年度〉

調査期間 3月4日（水）～3月24日（火）

3月4日（水）～3月7日（土）

機材搬入。C 地点表土剥ぎ・排土運搬。検出作業。

3月 10 日（火）～3月 13 日（金）

A 地点表土剥ぎ。遺構検出作業。清掃・写真撮影。土坑掘り下げ・実測。C 地点排水対策。

C 地点表土剥ぎ・排土運搬。

3月 16 日（月）～3月 21 日（土）

C 地点表土剥ぎ・排土運搬。A 地点埋め戻し・整地。

3月 23 日（月）～3月 24 日（火）

C 地点表土剥ぎ・排土運搬。

### 〈平成 21 年度〉

調査期間 7月 6 日（月）～9月 7 日（月）

7月 6 日（月）～7月 10 日（金）

機材搬入。基準杭・グリッド設定。A2・A3・B1・B3・C2 包含層掘り下げ、B3・C3 にサブトレンチ設定・掘り下げ。

7月 13 日（月）～7月 17 日（金）

B1・C1 包含層掘り下げ。B1 遺物集中箇所検出。C1 喜念 I 式土器出土。魚骨集中箇所検出。

7月 21 日（火）～7月 24 日（金）

A4・B2・B4・B5・B6・C2・包含層掘り下げ。

文化財めぐり・発掘体験

7月 27 日（月）～7月 31 日（金）

B4・C1・C2・C3・C4・D4 包含層掘り下げ。清掃・写真撮影。

8月 3 日（月）～8月 6 日（木）

B3・D4 包含層掘り下げ。A4・B4 遺物取り上げ。B3・B4・D4 ピット検出状況写真撮影。B4 ピット掘り下げ。

8月 10 日（月）～8月 14 日（金）

B3・B4・C3 清掃・写真撮影。ピット実測。C3・B4 掘り下げ。B 地点表土剥ぎ。B 地点清掃・写真撮影。ピット実測。A3・A4・B3・B4・C3・C4 包含層掘り下げ。

8月 17 日（月）～8月 21 日（金）

B2・B4・B3 混貝層検出。写真撮影。B2・B4 包含層掘り下げ。

8月 24 日（月）～8月 28 日（金）

B2・C4 清掃写真撮影。B2・B4・B5・C1・包含層掘り下げ。

8月 31 日（月）～9月 5 日（土）

B1・B2・B3・C4 包含層掘り下げ。清掃写真撮影。土層断面図作成。

9月 7 日（月）

機材撤収。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置及び地理的環境

揚殿遺跡は、大島郡知名町大字屋子母字揚殿に位置する。遺跡の所在する沖永良部島は、奄美群島に属する周囲 49.3 km、面積 94.51km<sup>2</sup>の島である。知名町は鹿児島から南へ 542 km、東北に和泊町と隣接し、東北に約 32 km を隔てて徳之島、南に約 33 km を隔てて与論島を、さらに 60 km を隔てて沖縄を望む位置にある。

気候は亜熱帯モンスーン気候区に属し、四季を通じて温暖な島である。島を取り囲むように珊瑚礁が発達する。特に南部海岸に顕著にみられる一方、北部海岸側では海食崖が連続してよく発達する。

地質学的にみると古生層を基盤とした第四紀琉球層群（隆起珊瑚礁）からなる比較的低平な島で、最高所の大山（標高 245m）を取り巻くような形で数段の段丘が形成されている。また、大山を取り囲むような形でカルスト地形が発達し、ドリーネ（凹地）が数多く分布している。全島にわたって石灰岩に覆われているため雨水は地下に浸透して段丘間の斜面下、ドリーネの底部、浸食の進んだ部分あるいは海岸付近に湧水・暗川となって現れ、地下には石灰岩洞穴を数多く形成している。これらの湧水・暗川は河川の少ない沖永良部島においては、この水源が遺跡の分布、集落の立地に大きな関わりをもっている。

今回調査を実施した揚殿遺跡は、知名町の南部の屋子母海岸から約 500m 内陸部に入った標高約 14～19m の緩斜面に位置する。遺跡の南西側の谷や屋子母海岸には豊富な湧水があり集落の水源として利用してきた。また、海岸線は本町でも有数の珊瑚礁が発達し、イノ一が形成され地元の人々の漁場や海水浴場として利用されている。南の方向には与論島・沖縄本島・伊平屋島を望むことができる。

町内の遺跡は南西部の屋子母地区～田皆地区の海岸付近に多く分布している。

### 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

知名町の遺跡が考古学的研究の対象となったのは昭和 32 年、九学会連合奄美大島共同調査の考古班による住吉貝塚（18）の発掘調査が最初である。調査では、自然の珊瑚礁の岩石面や石組みを壁面に利用した住居跡が 1 基発見され、遺物では宇宿上層式・宇宿下層式土器や石斧、貝・骨製品等が出土している。住居跡は、先行して調査が行われた宇宿貝塚の住居跡と同様に宇宿上層式期のものと考えられ、石組み住居跡が当該期における一般的な住居形態であったことが明らかにされた。

以下、町内の代表的な遺跡について調査年順に紹介する。

昭和 57 年から 59 年には河口貞徳氏・瀬戸口望氏・本田道輝氏らにより中甫洞穴（54）の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文早・前期の新型式の土器、縄文時代の土壙墓及び人骨、南九州の弥生時代後期の土器等が出土し、沖永良部島の歴史が縄文時代前半に遡ることや南九

州との関わりが明らかにされた。

また、昭和 57 年・58 年には沖縄国際大学、鹿児島大学により神野貝塚（15）、スセン當貝塚（14）の発掘調査が行われた。神野貝塚では縄文時代前期から縄文時代後期の土器が層序よく出土し、これにより從来不明であった南島縄文時代中期の土器に面縄前庭式があてはめられた。これらは沖縄国際大学の高宮広衛氏により面縄前庭様式として整理され、縄文時代中期から後期にかけての土器編年が示された。また、スセン當貝塚では、新型式の土器が出土しスセン當式土器と命名された。これら一連の調査の成果は不明な部分の多かった沖永良部島の先史時代を徐々に明らかにしていった。

昭和 60 年・63 年には、県営圃場整備事業に伴い、赤嶺原遺跡（56）、前当遺跡（71）が発掘調査され、赤嶺原遺跡では、類須恵器、青磁、スクニジュと呼ばれる中世の排水路等が確認された。また、知名町が主体となり遺跡分布調査も実施され、この調査により揚殿遺跡の存在が確認された。

昭和 62 年には熊本大学考古学研究室により石原遺跡（58）の発掘調査が実施された。遺跡は、個人の畠地造成、いわゆる「天地返し」により遺物が多量に散布していたため発見されたもので、縄文時代後期～縄文時代晚期頃の土器や貝製品等が出土している。平成 4 年には農業基盤整備事業に伴い浜須 A（47）、浜須 B（46）遺跡の発掘調査が実施され、浜須 B 遺跡では縄文時代後期～晚期の住居跡が 5 基確認された。

平成 12 年には、志喜屋武当遺跡（29）の調査が実施され縄文時代前期頃の土器と縄文時代後期前半と考えられる住居跡が 1 基確認されている。平成 13 年～平成 16 年にかけては、知名町教育委員会が主体となり住吉貝塚の範囲確認調査が実施された。14 基にのぼる住居跡や土坑に伴い、多くの貝・骨製品などが発掘され、縄文時代後期～弥生時代初頭期の集落跡であることが判明した。平成 19 年に国指定史跡となり記念シンポジウムも開催された。また、住吉貝塚から谷を隔てて約 200m に位置する友留遺跡（23）においても住吉貝塚よりやや新しい時期の仲原式土器期の住居跡が 14 基確認され、住吉貝塚との関係性が注目されている。

本遺跡の周辺には、スセン當貝塚、神野貝塚が所在するほか、詳細な時期は不明であるが琉球との交易物資を収納したといわれている浜倉の石積みが遺されており、縄文時代から近世にかけての人々の生活の営みを解明する上で重要な地区である。

#### 《参考文献》

町誌編纂委員会 1982 『知名町誌』

国分直一、河口貞徳、曾野寿彦、野口義廉、原口正三 1959 「沖永良部島住吉貝塚調査報告」『奄美 その自然と文化』日本学術振興会

沖縄国際大学考古学研究室 1987 『沖国大考古』第 9 号 沖縄国際大学考古学研究室

上村俊雄 1983 「沖永良部島の考古学的調査」『南日本文化』第 16 号 南日本文化研究所

上村俊雄・本田道輝 1984 「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『南西諸島の先史時代に於ける考古学的研究』鹿児島大学法文学部考古学研究室

熊本大学考古学研究室 1988 『石原遺跡』研究活動報告 22 熊本大学考古学研究室

- 知名町教育委員会 1984 『中浦洞穴』 鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 知名町教育委員会 1985 『赤嶺原遺跡』 鹿児島県大島郡知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 知名町教育委員会 1986 『知名町埋蔵文化財分布調査概報』 知名町文化財報告書（5）
- 知名町教育委員会 1988 『前当遺跡』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
- 知名町教育委員会 1993 『大当遺跡 浜須 A・B 遺跡』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 知名町教育委員会 2002 『志喜屋武当遺跡』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
- 知名町教育委員会 2006 『住吉貝塚』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
- 知名町教育委員会 2009 『友留遺跡』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（11）



第2図 周辺の遺跡

第1表 知名町遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	拂殿	皇子母字拂殿	丘陵	中世	無文土器	昭和60年度分布調査
2	泊り原	皇子母字泊り原	丘陵	中世		平成16年度分布調査
3	ヤイント	皇子母字ヤイント	丘陵	中世		平成16年度分布調査
4	塙津原ビ	皇子母字塙津原ビ	丘陵			昭和60年度分布調査
5	浜食	皇子母字浜食	平地			
6	川春	皇子母字川春	砂丘		青磁片	昭和60年度分布調査
7	当ノ増	皇子母字当ノ増	砂丘		土器・石器	昭和60年度分布調査
8	皇子母	皇子母半城村・上坂	丘陵		土器・石器	
9	皇子母セージマ古墳跡	皇子母字タケタ	丘陵			
10	水通洞	大津勘字蓬木保	丘陵	中世	類須恵器	昭和60年度分布調査
11	永良部洞	瀬利覺字スマン辻	山腹		類須恵器・歌晉	昭和60年度分布調査
12	大津勘フバド	大津勘字フバド	台地		類須恵器	昭和60年度分布調査
13	大津勘フーダトク	大津勘字フーダトク	台地		石斧	昭和60年度分布調査
14	スセン當貝塚	皇子母字スセン當	砂丘	古墳	土器(スセン當式)石器	昭和57年鹿大調査
15	神野貝塚	大津勘字神野	砂丘	縄文	土器(窪川下層式等)石器	昭和57・58年神岡大調査
16	昇龍洞	住吉字吉野平川	山腹	中世	人骨・管玉	
17	木部蘭追	住吉字木部蘭追	台地		無文土器・青磁片	昭和60年度分布調査
18	住吉貝塚	住吉字兼久	砂丘	縄文後期	土器(宇宿上層・下層式)	昭和32年九学会調査
19	新堀ノ前	住吉字新堀ノ前	平地	中世	類須恵器	平成16年度分布調査
20	四文当	住吉字四文当	台地	中世		平成16年度分布調査
21	手殿	住吉字手殿	台地		青磁・染付	昭和60年度分布調査
22	兼久	住吉字兼久	平地	中世		平成16年度分布調査
23	友留	住吉字友留	平地		無文土器	昭和60年度分布調査
24	阿部雍	住吉字阿部雍	台地	縄文～中世		平成13年度確認調査
25	具屋原	住吉字具屋原	台地	縄文～中世		平成10年度分布調査
26	内納当	住吉字内納当	台地	縄文・中世		平成9年度確認調査
27	千間	正名字千間	台地	中世	類須恵器	
28	下田	住吉字下田	台地	中世		平成12年度発掘調査
29	志喜屋武当	住吉字志喜屋武当	台地	縄文	住居跡	平成12年度発掘調査
30	ウロク畠A	正名字ウロク畠	台地		ふくご羽口	
31	ウロク畠B	正名字ウロク畠	台地		土器片	
32	ウロク畠C	正名字ウロク畠	台地		土器片	
33	正名字内間	正名字内間	台地	中世	類須恵器・白磁	昭和60年度分布調査
34	志良邊堂	正名字志良邊堂	台地	弥生・中世	類須恵器・石斧	平成9年度発掘調査
35	黒平	正名字黒平	台地			平成8年度確認調査
36	川仁堂B	正名字川仁堂	台地		土器片・類須恵器	
37	川仁堂A	正名字川仁堂	台地		土器片・類須恵器	
38	番野	正名字番野	台地		土器片	
39	池原	正名字池原	台地		類須恵器・青磁	確認調査
40	二保B	正名字二保	台地	縄文・中世		平成12年度発掘調査

第1表 知名町遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
41	池原B	正名字池原	台地	縄文・中世		平成7年度確認調査
42	伊倉良	正名字伊倉良	台地		土器片	
43	大平	正名字大平	台地	中世		平成13年度確認調査
44	二俣A	正名字二俣	台地	縄文・中世		平成11年度確認調査
45	阿岩	正名字阿岩	台地	縄文		平成12年度発掘調査
46	浜須B	田皆字浜須	台地	縄文後期～弥生	土器片	平成4年度確認調査
47	浜須A	田皆字浜須	台地	古墳～歴史	土器片・類須恵器	平成4年度確認調査
48	曾根	田皆字曾根	台地	古墳	土器片・チャート	
49	田皆伊美畑	田皆字伊美畑	台地		磨製石斧	
50	アンギム	下城字アンギム	台地		無文土器・類須恵器	
51	西目国内兵衛佐居城跡	下城字先間	山麓			
52	上城跡	上城字次石	山麓			
53	新城花窓モート墓	新城	平地			
54	中甫洞穴	久志検字水羅	ドリーム	縄文・弥生・歴史	土器(爪形文)石器・人骨	昭和57・58・59発掘調査
55	アーニマガヤ古墳跡	赤嶽字アーニ	丘陵			
56	赤嶽原	赤嶽字赤嶽原	丘陵	縄文・歴史	土器・須恵器・青磁	昭和59年度確認調査
57	イクサイヨー洞穴	余多字石喜喜	洞穴	縄文～古墳	人骨・土器・貝輪	昭和60年度分布調査
58	石原	余多字石原	台地	縄文	土器・石器・貝器	昭和62年熊大発掘調査
59	砂田	余多字砂田	台地	縄文		平成8年度農政分布
60	川切	余多字川切	台地	縄文～中世		
61	栄長島	余多字栄長島	台地	縄文～中世		
62	本田	余多字本田	台地	縄文～中世		
63	下平川2	下平川	台地		類須恵器	
64	下平川3	下平川	台地		類須恵器	
65	下平川1	下平川	台地	中世	類須恵器	
67	星者琉球式墳墓	星者字藤丸	平地			
68	星者高アタ子	星者字高アタ子	台地	弥生		平成18年度分布調査
69	上水塙	芦清良上字水羅	台地	中世	カムイヤキ	平成18年度分布調査
70	セキハナ	星者字セキハナ	台地	縄文		平成18年度分布調査
71	東風平	星者字東風平	台地	中世		平成18年度分布調査
72	前当	上平川字前当	台地	中世	類須恵器・鉄さい	
73	花城洞穴	上平川字花城	洞穴			昭和60年度分布調査
74	芦清良前金久	芦清良字前金久	砂丘		類須恵器	昭和60年度分布調査
75	前兼久	芦清良字前兼久	台地	縄文～中世		
76	星塙	芦清良字星塙	台地	縄文～中世		
77	高アタ子	黒質	台地	縄文		平成10年度確認調査
78	前兼久B	黒質	台地	弥生・中世		平成8年度確認調査
79	前兼久C	黒質	台地	中世		平成9年度確認調査
80	シャノ平	知名字シャノ平	丘陵	古代	土器片・石器	平成14年度発掘調査

## 第3章 揚殿遺跡・泊り原遺跡・ヤイント遺跡の試掘・確認調査

### 第1節 調査の概要

遺跡の所在する屋子母集落一帯は、昭和60年に知名町教育委員会が主体となり分布調査が実施され、揚殿遺跡・泊り原遺跡が確認されていた。今回、県営中山間地域総合整備事業沖永良部地区の事業対象地域となることから事業に先立ち鹿児島県教育委員会による遺跡分布調査が再度実施され揚殿遺跡・泊り原遺跡で遺物が採集されたほか、新たにヤイント遺跡の存在が確認された。平成17年度には、県教育委員会が試掘調査、平成18年度には、町教育委員会が確認調査を実施した。調査対象地は大部分が農地であるため、作物の作付け状況や地形等を考慮しながら、可能な限り多くの確認トレンチを設定するよう心懸けた。

調査は重機のバケット幅を基本とし、遺物包含層や遺構が確認されたトレンチについては適宜拡張し、検出作業を行った。

試掘・確認調査トレンチの位置は、第3図・第4図に、調査結果については、第2表に示した。

### 第2節 試掘・確認調査の結果

#### 1. 揚殿遺跡

揚殿遺跡では、平成17年度と平成18年度に39箇所のトレンチを設定し、調査を実施した。平成17年度の試掘調査では、36トレンチで遺物包含層から土器片が確認された。平成18年度の確認調査では、6トレンチと12トレンチにおいて、遺構が確認された。いずれも表土層直下で地山の赤褐色粘土層面での検出であった。36トレンチ付近は、北東方向にある低い段丘面を経て一旦平坦面をなす地点で、北方向にある谷へ向かい徐々に下がっていく地形である。6トレンチ・12トレンチは、36トレンチの西側で緩斜面を経て平坦地へ移行する地点である。

周辺のトレンチでは遺物包含層・遺構ともに確認されなかったことから遺跡は小規模で散在的に残存しているものと判断した。

#### 2. 泊り原遺跡

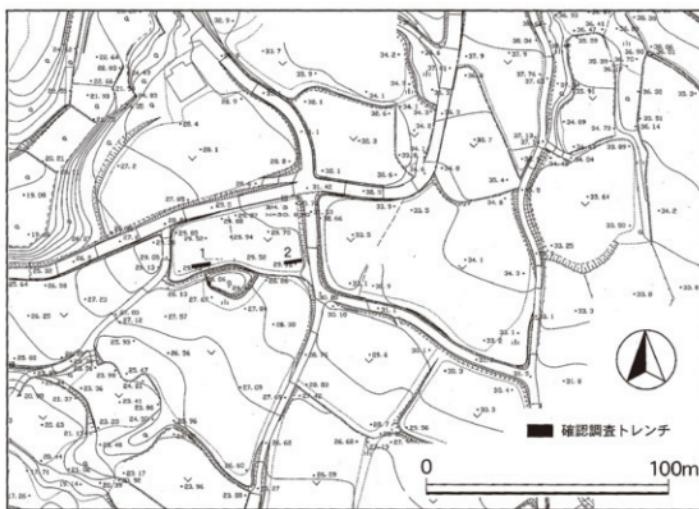
泊り原遺跡では、5箇所のトレンチを設定し、確認調査を実施した。1トレンチ・2トレンチ付近では、カムイヤキ等が確認されていたことから長いトレンチを設定し、遺構の検出を試みたが、遺物・遺構ともに確認されなかった。3トレンチ～5トレンチについても同様の結果であった。対象地の地形は、1トレンチ・2トレンチ付近は、揚殿遺跡同様に低い崖面から一旦平坦面をなし、3トレンチ～5トレンチ付近は、東から西へ延びる浅い谷の一部を整地し畑地としているようである。

#### 3. ヤイント遺跡

ヤイント遺跡では、2箇所のトレンチを設定し、確認調査を実施した。遺物・遺構ともに確認されなかった。対象地は、北側からの緩斜面から急斜面へ移行する地点である。耕作土は、地山



第3図 揚殿遺跡・泊り原遺跡試掘確認調査トレンチ位置図



第4図 ヤイント遭跡確認調査トレンチ位置図

と同様の赤褐色を呈しており、以前に土壤改良が行われたようで、分布調査時に発見された遺物は客土等に混入していた可能性がある。

第2表 試掘確認調査結果一覧表

遺跡名	トレン チ番号	面積 (m <sup>2</sup> )	包含層・ 遺構面ま での深さ (m)	遺物	遺構	備考
揚殿遺跡	1	15		-	-	
	2	10		-	-	
	3	11		-	-	
	4	15		-	-	
	5	19		-	-	
	6	12	0.4	-	○	土坑
	7	3		-	-	
	8	30		-	-	
	9	7.5		-	-	
	10	11.5		-	-	
	11	9		-	-	
	12	17	0.5	-	○	ピット
	13	7		-	-	
	14	9		-	-	
	15	8		-	-	
	16	7		-	-	
	17	3		-	-	
	18	5		-	-	
	19	7		-	-	
	20	3		-	-	
	21	2.5		-	-	
	22	3		-	-	
	23	2.5		-	-	
	24	3.5		-	-	
	25	2		-	-	
	26	2		-	-	
	27	3		-	-	
	28	3		-	-	
	29	5		-	-	
	30	4		-	-	
	31	3		-	-	
	32	6		-	-	
	33	6		-	-	
	34	4		-	-	
	35	6		-	-	
	36	28	0.3	○	-	土器
	37	14		-	-	
	38	28		-	-	
	39	32		-	-	
泊り原遺跡	1	8		-	-	
	2	21		-	-	
	3	10		-	-	
	4	3		-	-	
	5	6		-	-	
ヤイント遺跡	1	5.5		-	-	
	2	5.5		-	-	

## 第4章 揚殿遺跡の本調査

### 第1節 調査の概要

揚殿遺跡の本調査は、平成17年度～平成18年度に実施した試掘・確認調査時の結果をもとに、6トレンチ周辺を調査区A、12トレンチ周辺を調査区B、36トレンチ周辺を調査区Cとした。対象地の農作物の作付け状況との調整を図りながら、平成20年度に調査区A、平成21年度に調査区B・調査区Cの発掘調査を実施した。

### 第2節 調査区A

#### 1. 調査の概要

調査区Aは、東側の低い崖面から平坦面、さらに緩斜面を経て海岸へと続く平坦面へ移行する標高約14m～16mの畑地である。北西側と南東側には民家が存在するが、かつては谷状の窪地に挟まれた地形であったと考えられる。確認調査6トレンチにおいて土坑が検出された。本調査では当該箇所を中心に重機による表土剥ぎを行い、基盤層の赤褐色粘質土面において随時調査区を拡張しながら遺構の検出を行った。その結果、2基の土坑が検出された。また、一部において暗色のシミ状の箇所が確認されたため、トレンチを設定し確認を行ったが範囲が不規則であることや遺物等が確認されなかったため人為的なものではないと判断した。また、畑地改良のためと思われる攪乱箇所も確認された。

#### 2. 基本層序

- I層 褐色土（表土）
- II層 暗褐色土（無遺物層・部分的に薄く残存）
- III層 赤褐色粘質土（基盤層）

#### 3. 遺構（第5図）

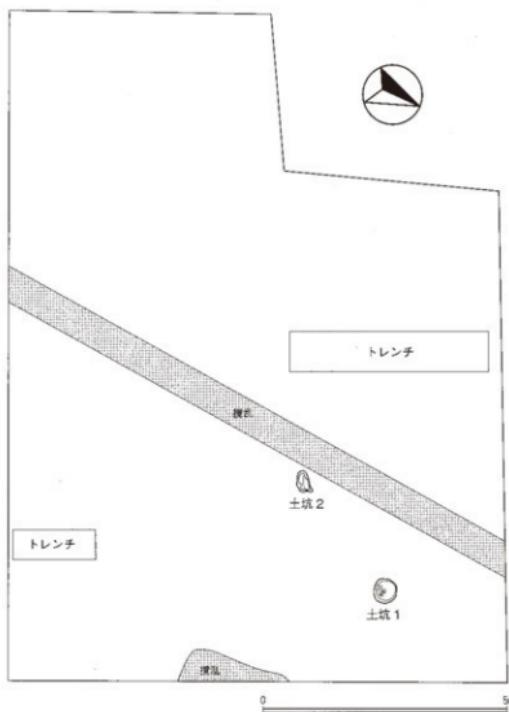
調査区北東側に2基の土坑が検出された。

##### 土坑1（第6図）

土坑1は、直径約50cmでほぼ円形で深さ約10cmである。遺構埋土は、表土層と同様の褐色土と基盤層の赤褐色土との混土であり、内部からは拳大の礫が検出された。遺物は含まない。埋土の状況から比較的新しい時期の掘られたものと考えられる。

##### 土坑2（第7図）

土坑2は、長軸約40cmのやや不規則な梢円形状で深さ約10cmである。遺構埋土は上部が炭化物・焼土塊を含む褐色土と暗褐色土の混土で、下部が暗褐色土と赤褐色土の混土であった。遺構内から遺物の出土はみられない。埋土に炭化物や焼土塊がみられることから火を受けた痕跡がうかがえる。遺構の時期や性格については不明である。



第5図 調査区A遺構配置図



第6図 土坑1

第7図 土坑2

### 第3節 調査区B

#### 1. 調査の概要

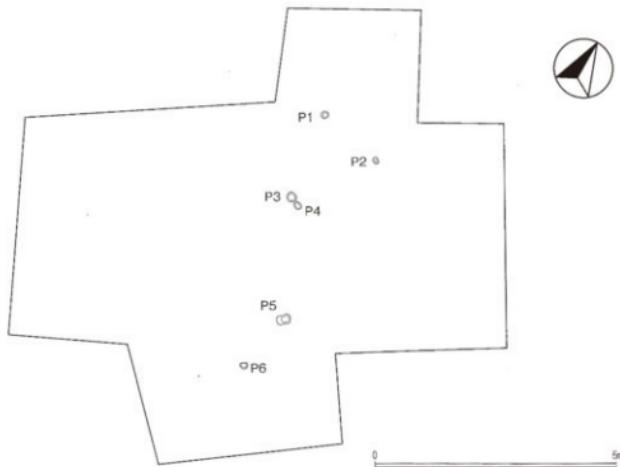
調査区Bは、調査区Aの東側に所在する標高約16m～17mの畠地である。確認調査12トレンチにおいてピットが確認された。本調査では当該箇所を中心に重機による表土剥ぎを行い、基盤層の赤褐色粘質土面において随時調査区を拡張しながら遺構の検出を行った。その結果、6基のピットが検出された。

#### 2. 基本層序

- I層 褐色土（表土）
- II層 赤褐色粘質土（基盤層）

#### 3. 遺構（第8図）

調査区中央部の北から南方向に6基のピットが検出された。深さは、ピット1・2が11cm、ピット5が8.5cmでピット3・4・6が3cm～5cm程度である。遺構内から遺物は検出されていない。規則的な配列が見られず、遺構の時期・性格については不明である。



第8図 調査区B 遺構配置図

## 第4節 調査区C

### 1. 調査の概要（第9図）

調査区Cは、北東方向にある低い段丘面を経て一旦平坦面をなす地点で、北方にある谷へ向かい徐々に下る地形である。試掘調査36トレンチにおいて遺物包含層が確認されたため、本調査では当該箇所を中心に重機による表土剥ぎを行い、遺構検出作業及び遺物包含層の掘り下げを行った。調査区では5m×5mのグリッドを設定後、サブトレンチを設定し土層の堆積状況を確認しながら包含層の掘り下げ及び遺構の検出を行った。遺物は各層グリッド単位で取り上げ、遺物が集中する箇所については、グリッドを4分割し、小グリッド単位で取り上げた。

試掘・確認調査時の周辺トレンチの状況から、当該地点は遺物包含層が薄く残存しているものと想定していたが、サブトレンチで層序を確認した結果、東から西へ延びる溝状の窪地へ遺物が堆積していることが判明した。この掘り下げに多くの人員と時間を要し、結果的に調査期間を延長することとなった。

調査の結果、II層・IV層・IV'層・VI層・VII層が遺物包含層であり、III層上面においてピットが検出された。調査後の整理作業において、遺跡の地形や性格、各層の遺物の出土状況を検討した結果、II・III層を第1文化層、IV・IV'・VI・VII層を第2文化層とする大きな枠組みでとらえることとした。

### 2. 基本層序（第10図）

- I 層 褐色土（表土）現在の耕作土。
- II 層 暗褐色土（遺物包含層）B1～2、C1～2には見られない。耕作等による削平が考えられる。
- III 層 にぶい赤褐色土（遺物をほとんど含まない）しまりが悪く、赤色粒や基盤層の赤褐色粘質土のようなブロックを含む層である。
- IV 層 黒褐色土（遺物包含層）赤色粒を含む。
- IV' 層 黒褐色土（遺物包含層）混貝層で自然遺物を多く含む。
- V 層 黄褐色土（遺物をほとんど含まない）部分的に確認できる層で、B区中央付近から北側に堆積する。
- VI 層 黑褐色土（遺物包含層）自然遺物を多く含む。
- VII 層 暗褐色土（遺物包含層）基盤層直上で部分的に薄く堆積する。
- VIII 層 赤褐色粘質土（基盤層）

### 3. 出土遺物の分類（第11図）

ここでは、一定量出土している土器の分類概念を記述する。滑石混入土器、石器、石製品、カムイヤキ、鉄製品などは個別に扱う。

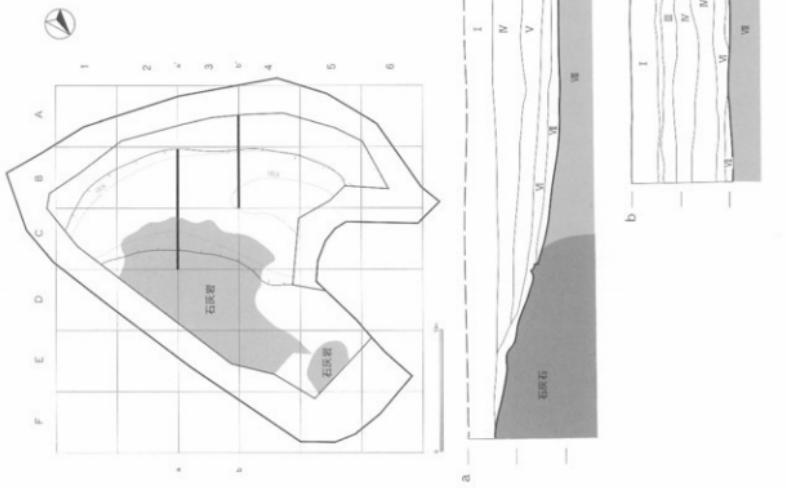


第9図 調査区C グリッド配置図

#### 土 器

土器の器種については、小片が多く口径の復元や全形をうかがえるものが少ないので、口径が12cm以下のもの及び口縁部の屈曲が強く胸部にかけて膨らむ器形が推定できるものを壺形土器とし、それ以外を甕形土器に含めた。滑石混入土器については、出土点数が少ないので個別に扱った。

第10图 调查区C土层断面图



### 壺形土器

- I類 口縁部が三角形状に肥厚する。頸部から胴上部に細突帯を貼り付け、その両脇に刺突を施すもの。細突帯を沈線に置き換えたものも本類に含める。
- II類 口縁部が三角形状に肥厚し、肥厚下位に縦位もしくは斜位の沈線を施すもの。
- III類 口縁部が三角形状もしくは蒲鉾状に肥厚するもの。
- IV類 口縁部が略三角形状に肥厚する無文のもの。III類より肥厚部の厚みを減じ、扁平になる。
- V類 羽状の沈線を施すもの。
- VI類 頸部から胴上部に連続刺突を施すもの。
- VII類 口縁部が肥厚しないもの。
- VIII類 上記に分類できなかつたものを一括する。

### 壺形（深鉢形）土器

- I類 口縁部に沈線による綾杉状の文様を施すもの。山形口縁をなす。
- II類 口縁上端が長方形状に肥厚するもので、肥厚部には斜沈線を施す。肥厚部下位には、縦位と横位の連続刺突を施し、文様帶を形成する。文様帶下部は段差をなす。
- III類 口縁部が三角形状または蒲鉾状に肥厚するもの。口縁部に山形突起を有するものである。縦位の沈線を施すものもある。
- IV類 口縁部が三角形状または長方形状に肥厚するもので、III類よりやや幅広となり、その厚みを減じるもの。
- V類 口縁部が台形状に肥厚するもの。山形突起を有するものもある。
- VI類 口縁肥厚部が幅広で扁平なもの。
- VII類 横位・縦位の刻目隆帯を有するもの。
- VIII類 横位・縦位の刺突を有するもの。刺突はII類より幅広である。
- IX類 肥厚しない無文の口縁部。突起を貼り付けるものもある。
- X類 上記いずれにも分類できなかつたものを一括する。

### 鉢形土器

- I類 口縁部に刻目突帯を有するもの。
- II類 口縁部が三角形状に肥厚するもの。
- III類 三角形状・蒲鉾状の口縁肥厚部が扁平化したもの。

### 底部

- I類 平底のもの
- II類 尖底のもの
- III類 くびれ平底のもの
- IV類 底面がやや丸みを帯び、緩やかに立ち上がるものの。

土器の胎土は、次の2類に大別した。金雲母の有無は土器観察表に示した。

A類 砂質の胎土で、鉱物粒・砂礫等を多く含むもの。2mm以上の粗い粒子を含むものもある。

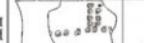
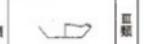
B類 泥質の胎土で、粗い鉱物粒をほとんど含まないもの。

### カムイヤキ

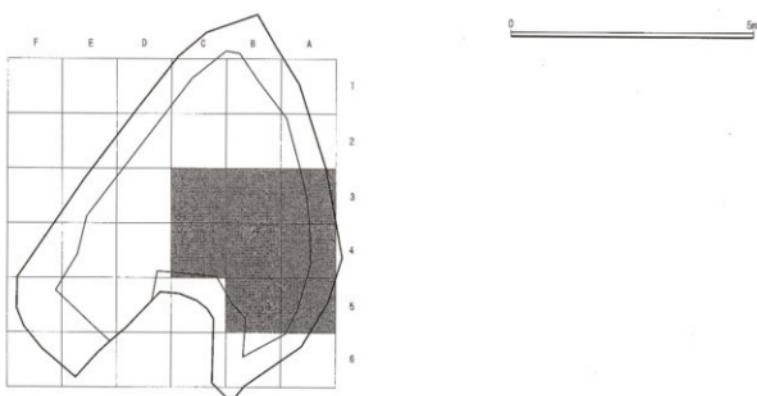
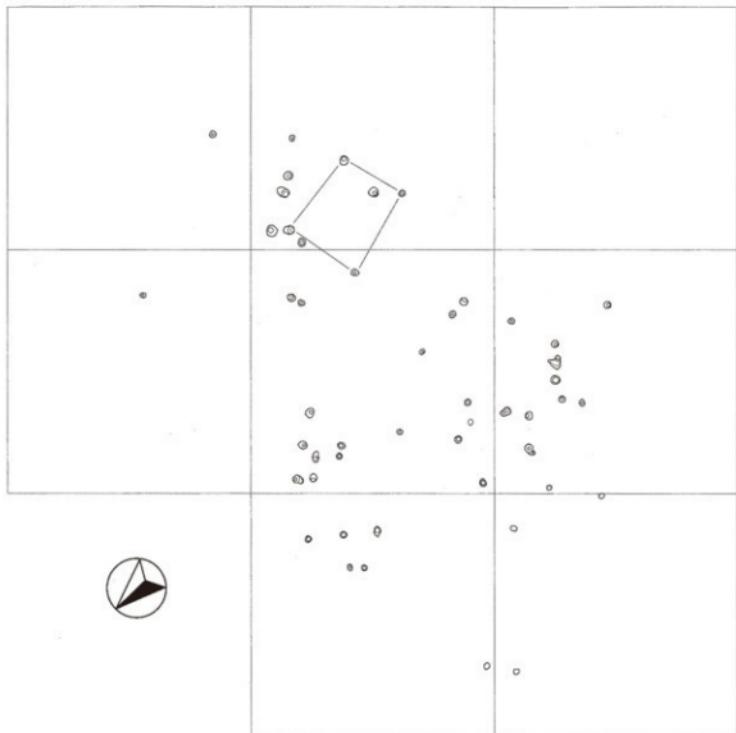
カムイヤキの分類については、新里亮人による分類（新里 2005）を引用した。

《参考文献》

新里亮人ほか 2005 『カムイヤキ古窯跡群 IV』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

変形土器			
I類			
II類			
III類			
IV類			
V類			
VI類			
VII類			
VIII類			
鉢形土器			
I類			
II類			
III類			
変形土器			
I類			
II類			
III類			
IV類			
V類			
VI類			
VII類			
VIII類			
IX類			
X類			
鉢形土器			
I類			
II類			
III類			
底部			
I類			
II類			

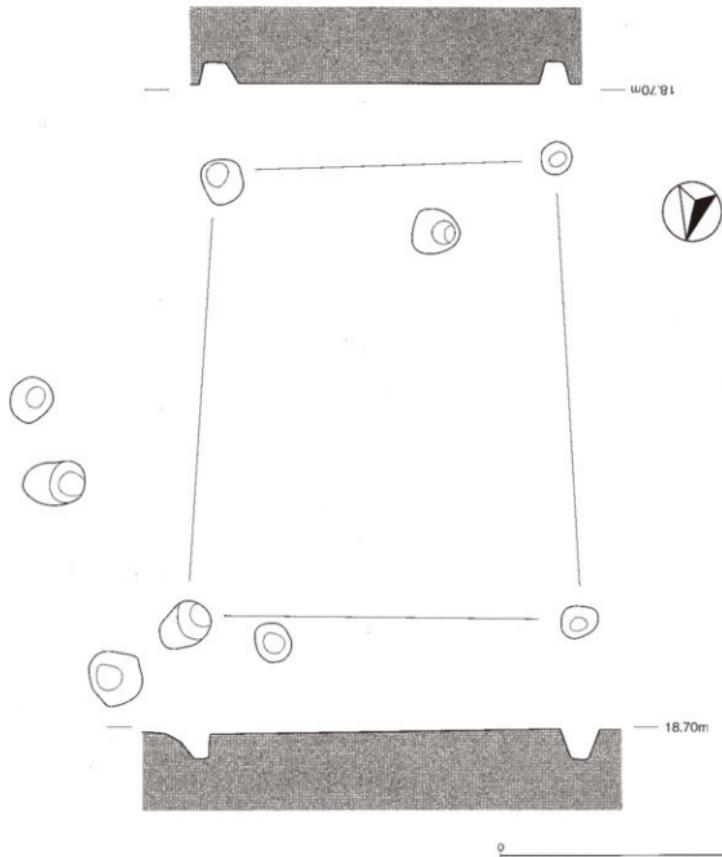
第11図 土器分類図



第12図 調査区C 遺構配置図

#### 4. 遺構（第12図・第13図）

遺構は、III層上面においてピットが49基検出された。検出状況は、A4・B3・B4・B5グリッドに集中している。ピット内からの遺物の出土はみられない。深さは7cm～18cmで特に10cm未満のものが多い。



第13図 堀立柱建物跡

### 掘立柱建物跡

B 3 区西側から B 4 区にかけて検出された遺構で、4 本の柱穴で構成される。南北方向に長軸を設定し、規模は 1 間 × 1 間（約 1.6m × 1.9m）である。柱穴は直径 15~20 cm、深さ 10~15 cm である。遺構の性格等は不明である。

## 5. 遺物

### 第 1 文化層

#### 土 器

##### 壺III類（第 14 図 1）

1 は口縁部を三角形状に肥厚させるもので、胎土に 1 mm 以下の白色粒を多く含む。

##### 壺III類（第 14 図 2～5）

2～5 は口縁部を三角形状に肥厚させるものである。2・3 の胎土は B 類である。4 は、緩い山形突起を有するものと考えられる。5 は、1 mm～4 mm 程度の白色粒及び金雲母を多く含む。

##### 壺IV類（第 14 図 6～7）

6 は口縁部が間延びした三角形状に肥厚するもので、肥厚頂部は III 類に比べ下位にあり、明確な段を有している。7 は肥厚部からなだらかに胴部に移行するものである。

##### 壺VII類（第 14 図 8）

8 は刻目隆帯を施すものである。小片のため判然としないが、隆帯の貼り付けは断続的である可能性がある。胎土は、砂礫を多く含む。

##### 壺VII類（第 14 図 9～11）

9 はやや不規則な横位の刺突が施される。10 は縦位の刺突が施されるもので、焼成は良好で堅緻である。外面・内面とも丁寧なナデ調整が施されている。壺の可能性もある。11 は横位の刺突が施されるもので、胎土には微細砂粒を多く含む。

##### 底II類（第 14 図 12～13）

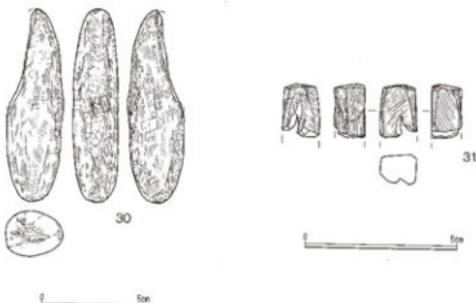
12・13 は尖底である。13 はやや厚みがあり砂礫を多く含んでいる。

##### 底III類（第 14 図 14～23）

14～23 はくびれ平底の一群である。22・23 には、底面に木葉痕が確認できる。16 は、底面に付け足した粘土を上部に折り返している。14・19・20・21・23 は、厚みのある底部である。23 は明赤褐色の胎土で、白色粒を多く含みやや脆弱である。



第14図 第1文化層出土土器等



第15図 第1文化層出土石器

#### 滑石混入土器（第14図24）

24は口縁部片である。口縁端部は丸みを帯びている。

#### カムイヤキ（第14図25～28）

25・26は口縁部が外側に強く屈曲する壺と考えられるもので、内外面ともに回転ナデにより丁寧な調整が施されており、叩き痕等は認められない。同じ層から出土した胴部片の大部分に平行線や格子目の当て具痕が確認できることや口縁部断面形態から新里分類のA群と判断した。25が壺A I 2類、26が壺A I 3類に該当すると考えられる。27・28は底部資料である。内外面ともにナデ調整が施されるが、27は外面に叩き痕、内面に粘土接合痕を残す。

#### 陶 器（第14図29）

29は、碗の底部である。沖縄産の施釉陶器で、「フィガキ」と呼ばれる漬け掛け技法により施されたものと考えられ、淡緑色釉が確認できる。II層検出時に得られたもので、元来I層に含まれていたものと考えられる。

#### 石 器（第15図30～31）

30は棒状の礫を利用した敲石と考えられ、端部と侧面に敲打痕が残る。砂岩製で、長さ9.5cm、残存幅2.8cm、厚さ2.2cm、重量76.3gを計る。31は輝緑岩を素材とし、全面に研磨がなされている。残存している部分で、長さ1.7cm、幅1.2cm、厚さ1.0cm、重量3.7gを計る。中央には、自然の有孔部がみられる。欠損しているため、全体の形状は不明である。有孔部に紐を通し、携帯用の砥石として利用された可能性がある。和泊町友竿遺跡で類似資料が表採されている。

第3表 第1文化層出土土器・カムイヤキ・陶器観察表

探査番号	出土場所	層	分類	地土				色 国		測量等		備考		
				集成	成	分類	金	母	鐵	外	内	外表面	内表面	
鉢	皿	盆	入											
1 A 3	II	東面傾	○	A	△	○	に	い赤	明赤褐	—	—	1cm粒子多く含む 赤・黒色粒子		
2 B 2	II	東面傾	○	B	○	灰黄褐	褐褐	—	—	ナダ	やや肥厚			
3 A 5	II	東面傾	○	B	○	裡	明赤褐	—	—	—	—	1cm粒度の粒子少含む 配置		
4 A 4	II	東面傾	○	A	○	明赤褐	明赤褐	ナダ	ナダ	—	—	微細砂粒		
5 B 3	II	東面傾	○	A	○	に	い褐	に	い裡	—	ナダ	1~4mm程度の白色粒含む		
6	II	東IV期	○	A	○	明赤褐	明赤褐	—	—	—	—	微細砂粒 1cm程度の 粒子少含む		
7 B 2	II	東IV期	○	A	○	明赤褐	明赤褐	ナダ	ナダ	—	—	微細砂粒		
8 B 1	II	東IV期	○	A	△	○	に	い褐	明赤褐	刺目・陰薄	ナダ	—		
9 B 1	II	東IV期	○	A	△	○	に	い褐	明赤褐	刺突	ナダ	—		
10 B 2	II	東IV期	○	A	○	裡	裡	ナダ・刺突(丁 等)	ナダ	—	—	—		
11 B 3	II・III上	東IV期	○	A	○	黑褐	赤褐	刺突	ナダ	—	—	—		
12 B 1	II	底II層	○	A	○	赤褐	赤褐	—	—	ナダ	—	—		
13 B 4	II	底II層	○	A	○	明赤褐	黃褐	—	—	—	—	1cm程度の粒子多く含む 黄		
14 A 3	II	底II層	不	○	A	○	明褐	明褐	—	オサエ	—	1cm程度の砂粒少量含む		
15 C 4	II	底II層	不	○	A	△	裡	裡	—	—	—	微細砂粒		
16 C	II上	底II層	○	○	A	○	明赤褐	明赤褐	ナダ	ナダ	—	流入微細 黑褐色や 含む		
17 C 4	II	底II層	○	○	A	○	裡	裡	オサエ	ナダ(丁事)	—	1cm程度の粒子少含む		
18 A 3	II	底II層	—	○	A	○	裡	裡	—	—	—	微細砂粒含む 1cm~2 mm粒子含む		
19 C 3	III	底II層	—	○	A	○	明赤褐	明赤褐	オサエ	ナダ	—	—		
20 B 3	II・III上	底II層	—	○	A	○	明赤褐	明赤褐	オサエ	オサエ	—	1cm以下粒子中心		
21 A 3	II	底II層	—	○	A	○	明赤褐	に	い褐	オサエ	不明	1cm以下粒子含む		
22 B 3	II・III上	底II層	○	○	A	○	明赤褐	明赤褐	オサエ	オサエ	—	微細砂粒含む 粉っぽい		
23	II	底II層	○	△	A	○	明赤褐	明赤褐	オサエ・ナダ	ナダ	—	1cm程度の粒子多く含む		
24 A 4	II	滑石混入	○	A	○	明赤褐	に	い赤褐	ナダ	—	—	—		
25	II	カムイヤキ	△	A	—	灰	灰	回転ナダ	回転ナダ	—	—	—		
26 B 4	II	カムイヤキ	○	A	—	灰	灰	回転ナダ	回転ナダ	—	—	—		
27 B 3	II・III上	カムイヤキ	○	A	—	灰	灰	回転ナダ	回転ナダ	—	内面接合痕	—		
28 A 4	II	カムイヤキ	△	A	—	灰	灰	ナダ	ナダ・工具ナダ	—	—	—		
29 C 2	II上	近世窯器	—	A	—	—	—	—	—	—	—	—		

第4表 第1文化層出土石器計測表

探査番号	遺物番号	注記番号	器種	石材	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
15	30 C 3		砾石	砂岩	II・III上	9.5	(2.8)	2.2	(76.3)
	31 A 3		砾石	輝緑岩	II	(1.7)	(1.2)	(1.0)	(3.7)

※欠損部分がある場合は( )書き

## 第2文化層

### 土 器

#### 壺I類（第16図32～34）

32・34は口縁部が三角形状に肥厚するものである。頸部に細突帯が貼付され、その両脇に刺突が施される。34は山形突起を有し、2条の縦沈線が確認できる。33は細突帯が沈線に置き換わり、その両脇に刺突が施される。胎土には砂礫を多く含む。いずれも比較的丁寧にナデ調整が施されている。

#### 壺II類（第16図35）

35は口縁部が三角形状に肥厚し、その下位に斜沈線が施される。胎土には微細砂礫を多く含む。

#### 壺III類（第16図36～46）

36～46は口縁部が蒲鉾状もしくは三角形状に肥厚するものである。36・40・41・46は泥質の胎土で混入物をほとんど含まない。37・39・42は粗い鉱物粒や砂礫を多く含む。46は復元口径約10cmの土器で、蒲鉾状に肥厚した口縁部から胴部に向かってハの字状に広がる器形である。内外面ともに比較的丁寧なナデ調整がなされている。

#### 壺IV類（第16図47～50）

47はやや薄手の土器で、口縁部はIII類に比べ扁平になり、頸部との間に段をなす。胎土は鉱物粒を多く含む。49は復元口径約10cmで、口縁肥厚部が扁平な三角形状をなす。肥厚部には指オサエ痕を残している。胎土には、微細鉱物粒を多く含む。50は厚手の土器で、口縁部が僅かに肥厚し、なだらかに頸部へと移行する。泥質の胎土で、赤色粒を少量含む。

#### 壺V類（第16図 51～52）

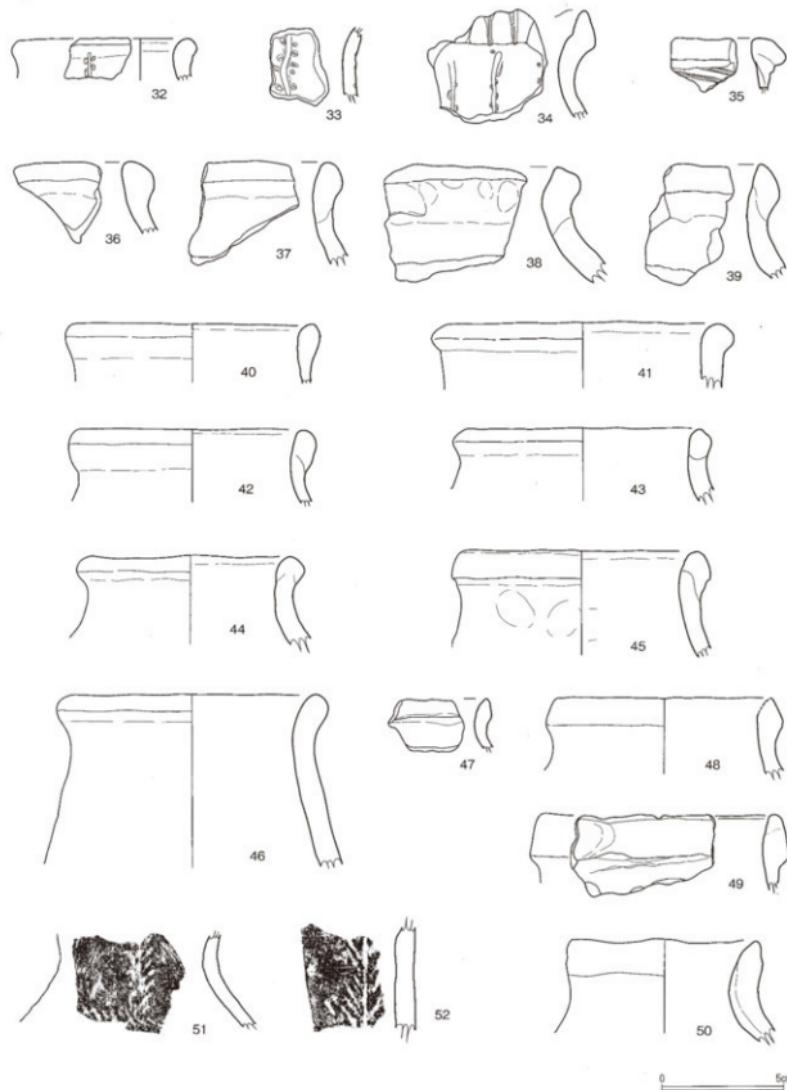
51は頸部から胴上部の破片である。縦位と横位の有軸羽状文が確認できる。羽状文の軸は断続的な沈線からなり、その両側に斜位の沈線が組み合わされる。比較的薄手で焼成は良好である。52は有軸羽状文が施された頸部片と考えられる。胎土は微細鉱物粒や金雲母を多く含む。

#### 壺VI類（第17図 53～54）

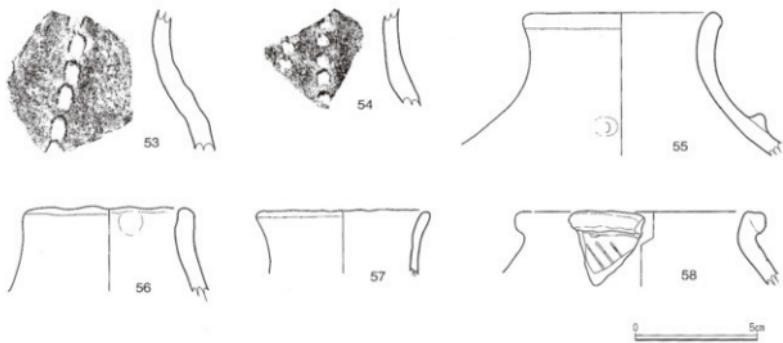
53・54は頸部から胴上部の破片で、約4mm幅の工具による縦位の刺突が施される。外面は比較的丁寧にナデ調整が施されるが、内面には指頭痕が残りデコボコしている。いずれも胎土には微細鉱物粒を多く含み、焼成は良好である。

#### 壺VII類（第17図 55～57）

55は口縁部から頸部の破片である。やや外反した口縁部から頸部で一旦すぼまり、胴部に向かい広がる器形である。胴上部に突起が貼付される。破損のため突起部の全形は不明である。泥質の胎土で黒色粒を多く含む。焼成は良好である。57は口縁部がやや外反する薄手の土器である。



第16図 第2文化層出土土器（1）



第17図 第2文化層出土土器(2)

内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。泥質の胎土で、焼成は良好である。

#### 壺VII類（第17図58）

58は、口縁部が方形状に肥厚するもので、外側への張り出しが強調されている。口唇部は平坦面をなす。肥厚部下位には斜位の沈線が施される。胎土には金雲母を多く含む。

#### 壺I類（第18図59）

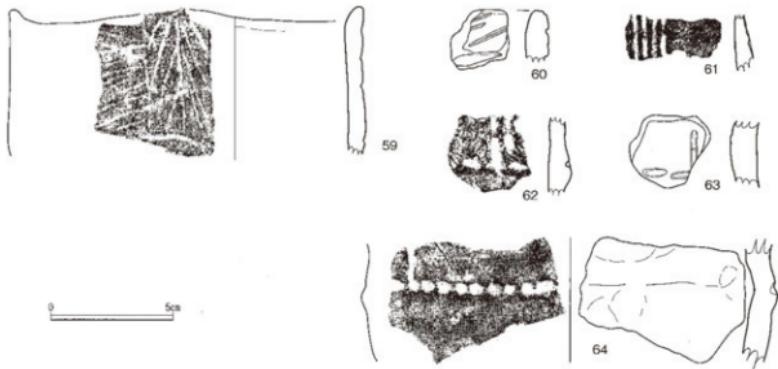
59は山形（波状）口縁部片で、口唇部には刺突が施される。文様は縦位と斜位の沈線の組み合わせからなり、胴部との境目に横位沈線を施し文様帯を形成している。施文は雑な印象を受ける。胎土には、1mm～2mmの白色鉱物粒や大粒の砂礫を多く含む。内面は比較的丁寧なナデ調整が施される。

#### 壺II類（第18図60～64）

60は長方形状に肥厚する口縁部片で、僅かな段をなす。口縁部には斜位の短沈線が施される。胎土には粗い白色鉱物粒を多く含む。61は、約1mm幅の工具による縦位の押し引き状刺突が4条施される。胴部に向かい器壁の厚みを増すことから、段を形成するものと思われる。また、破損しているが、有段部直上に横位の刺突の痕跡を残す。62・63は約2mm幅の工具による縦位・横位の刺突が施される。胎土・色調ともに60と類似する。64は縦位の沈線と横位の刺突が確認できる。内面には粘土接合痕を残す。やや厚手の土器で、胎土には、白色鉱物粒を多く含む。

#### 壺III類（第19図65～89）

65～68・71・72は、口縁部が蒲鉾状に肥厚する一群である。73～89は口縁部が三角形状に肥厚する一群である。71・81は泥質の胎土である。87～89は口縁部に山形突起を有するものである。



第18図 第2文化層出土土器(3)

81は一旦口縁部を肥厚させた後、更に粘土を付け足し整形しているが、最終的な器面調整が徹底せず、接合痕を残している。89は厚手の土器で、比較的丁寧なナデ調整が施される。胎土は微細鉱物粒を多く含み、焼成は良好である。

#### 壺IV類（第20図 90～101）

91は三角形状に肥厚した口縁部で、頂部が下位に位置するものである。92・94は肥厚部が扁平でやや丸みを帯びる。幅約2cmで肥厚部から僅かな段をなし胴部へと移行する。93・95・96・98・101は肥厚部が扁平となるもので、肥厚部中央が指オサエにより若干くぼませている。97・100は肥厚部の厚みが胴部とほぼ同じ厚さとなり、肥厚部下部に僅かな段をなし胴部へと移行する。94・96はやや粗い鉱物粒を多く含み、他は微細鉱物粒を中心とした胎土である。

#### 壺V類（第20図 102～107）

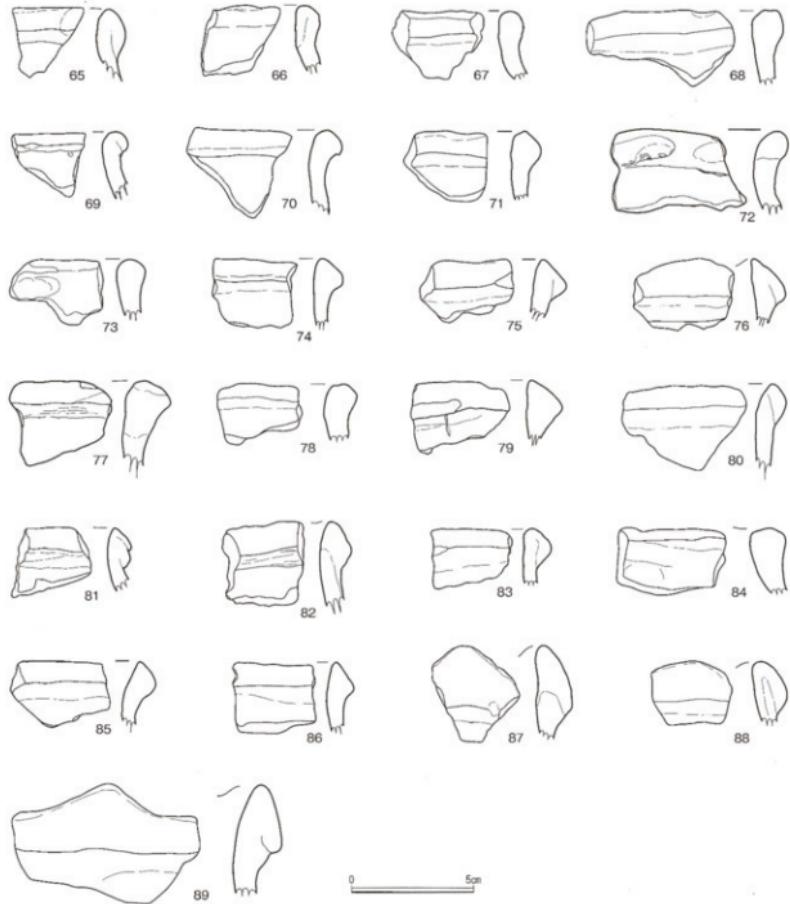
102～105は肥厚部が台形状をなす一群で、口唇部を平坦に形成する特徴を有する。103は山形突起を有するやや厚手の土器である。106は肥厚部下位に縦位の沈線が確認できる。胎土はいずれも微細鉱物粒が中心で、105・106は赤色粒も含んでいる。

#### 壺VI類（第20図 108～112）

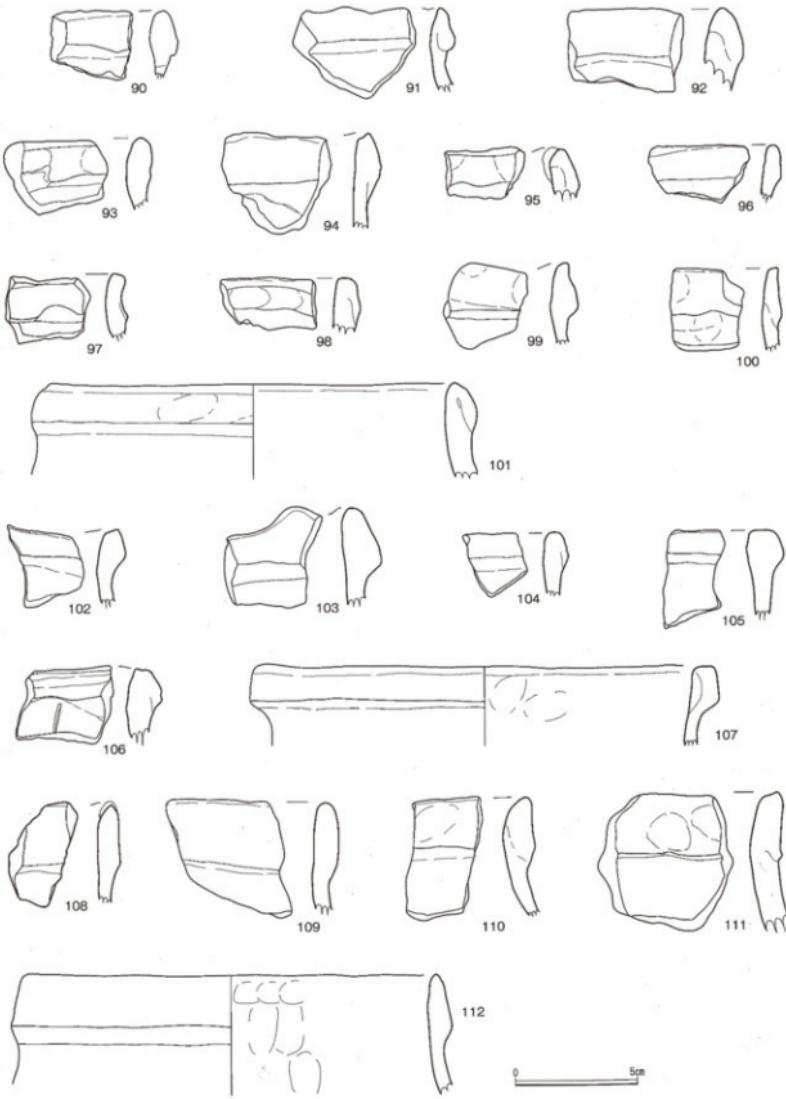
108～112は長方形状の肥厚部を有する一群である。約2cm～2.5cmの肥厚部から段をなし胴部へと移行する。胴部が僅かに膨らむ器形と考えられる。109～112は明赤褐色を呈し、粗い鉱物粒を多く含み、色調・胎土に共通性がみられる。

#### 壺VII類（第21図 113～118）

113はやや外反する口縁部で、口唇部から口縁部にかけて縦位の刻目隆帯が確認できる。胎土



第19図 第2文化層出土土器 (4)



第20図 第2文化層出土土器 (5)

には金雲母を含む。焼成は良好である。114～118は口縁部から胴上部の資料である。114は隆帶上から土器本体に至る深い刺突が施される。外面は丁寧なナデ調整が施されているが、内面は指頭痕を残している。胎土は、微細鉱物粒と中心として、やや粗い鉱物粒を少量含む。114・116・117は胎土・調整等が類似している。115は厚手の土器で粗い鉱物粒を多く含む。118は、幅広の隆帶にへラ状工具を押しつけたような幅広の刻みが施される。胎土は、微細鉱物粒を多く含む。内外面とも比較的丁寧にナデ調整が施される。

#### 甕VII類（第21図119～141）

119は口縁上端部がやや外反する器形である。工具をほぼ垂直に押し当てたような刺突が確認できる。内外面とも比較的丁寧なナデ調整が施される。120・121は119と施文方法・胎土が類似している。121は縦位の刺突が確認できる。123は横位の刺突が施される土器で施文箇所を境に緩く屈曲する器形である。内外面ともに比較的丁寧なナデ調整が施される。128は幅広の工具による刺突が施される。129～132・135は約4mm幅の工具による深い刺突が施されるものである。131は横位の刺突と縦位の施文の一部も確認できる。内外面ともに工具による調整痕が残る。134は口縁上端内側に粘土が付け足されやや膨らみを有している。138は外反する口縁部で縦位に幅広で浅い刺突が施される。140は幅広で浅い刺突が施される。全形が不明であるため本類に含めているが壺形土器の可能性もある。141は外反した口縁部から胴上部に至る資料である。横位の刺突と縦位に2条の刺突が施される。内外面ともナデ調整が施されるが指頭痕や粘土接合痕が残る。胎土は2mm～3mmの粗い鉱物粒を含む。

#### 甕IX類（第22図142～154）

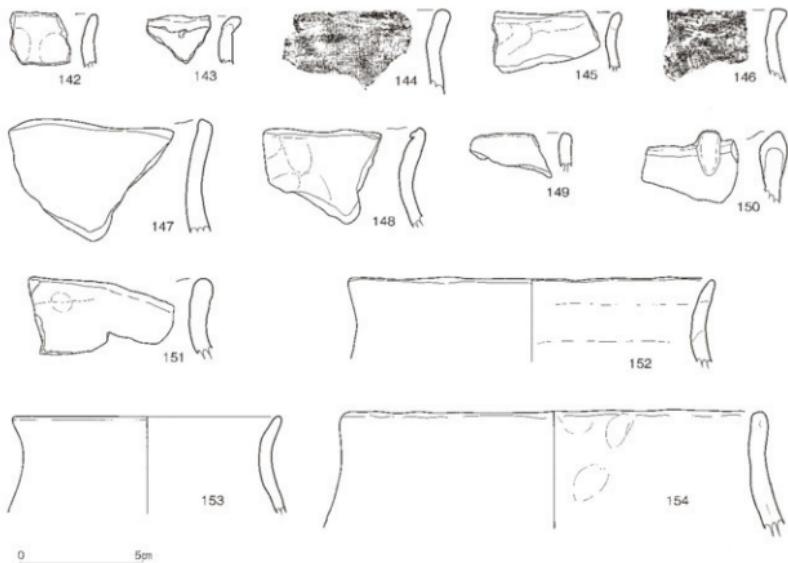
143は薄手の土器で口縁部上端が外側に張り出している。147はやや外反する口縁部である。内外面とも丁寧なナデ調整が施される。胎土は微細鉱物粒を多く含み、焼成は良好である。150は口唇部をまたぐ突起が貼付されるものである。外面は丁寧なナデ調整が施されるが、内面は、突起を貼付したオサエ痕が明瞭に残っている。胎土は、微細鉱物粒を非常に多く含んでいる。153は薄手の土器で口縁部が外反する器形である。胎土には扁平な鉱物粒や砂礫を多く含む。154は口縁部から胴部に向かい緩やかに広がる器形である。内外面とも丁寧なナデ調整が施される。胎土は白色鉱物粒を多く含む。焼成は良好である。

#### 甕X類（第23図155～161）

155は山形口縁の頂部で斜位に2条の短沈線が施される。胎土は微細鉱物粒を多く含む。156はやや屈曲した口縁部の上端及び下端に刺突を施すものである。胎土は白色鉱物粒を多く含む。157は口縁部上端が僅かに肥厚する土器である。口唇部と肥厚部下位に横位の刺突を施す。厚手の土器である。158は口縁部が方形に肥厚する土器である。胎土は白色鉱物粒と金雲母を非常に多く含む。159は屈曲した胴部で横位の短沈線が施される。160はビーナツ上の突起が貼付される土器である。部位は判然としない。泥質の胎土で赤色鉱物粒を含む。焼成は良好である。161は口縁部が肥厚し、その下位に斜位の沈線を施す。口唇部は平坦面をなす。



第21図 第2文化層出土土器(6)



第22図 第2文化層出土土器(7)

#### 鉢形土器

##### 鉢I類 (第23図162)

162は口縁部片で2条の刻目突帯を有する。泥質の胎土で、焼成は良好である。

##### 鉢II類 (第23図163)

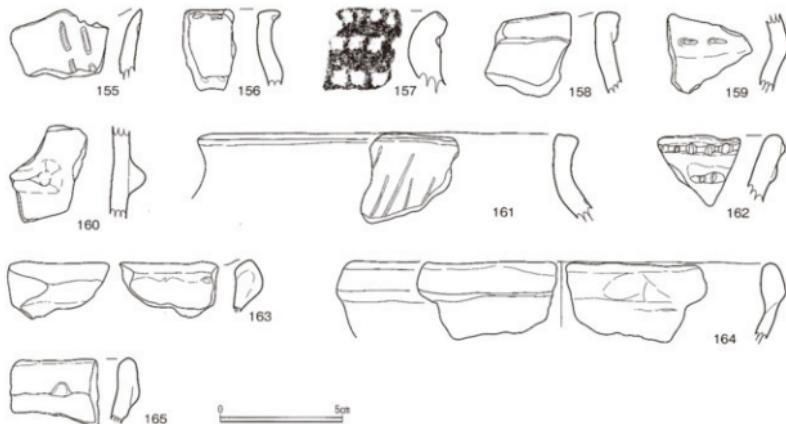
163は、口縁部が三角形状に肥厚する土器である。口縁部に貼り付けられた粘土が内面まで及び僅かに膨らんでいる。

##### 鉢III類 (第23図164~165)

164は肥厚した口縁部から僅かな段を経て胴部へと至る器形である。胎土は微細鉱物粒を多く含み、焼成は良好である。内面は指頭痕が残る。165は胎土に1mm~4mmの鉱物粒を含み、焼成は良好である。

##### 底I類 (第24図166~168)

166~168は平底となるものである。166は薄手の土器で、胴部に向かい開く器形である。167は白色鉱物粒と金雲母を多く含む土器である。168は厚手の底部で、内外面ともデコボコしている。



第23図 第2文化層出土土器 (8)

胎土は粗い鉱物粒を多く含む。

#### 底II類 (第24図 169~172)

169~171は下端部がやや平坦となる。172はやや丸みを帯びている。泥質の胎土で、焼成は良好である。

#### 底III類 (第24図 174~188・第25図 189~200)

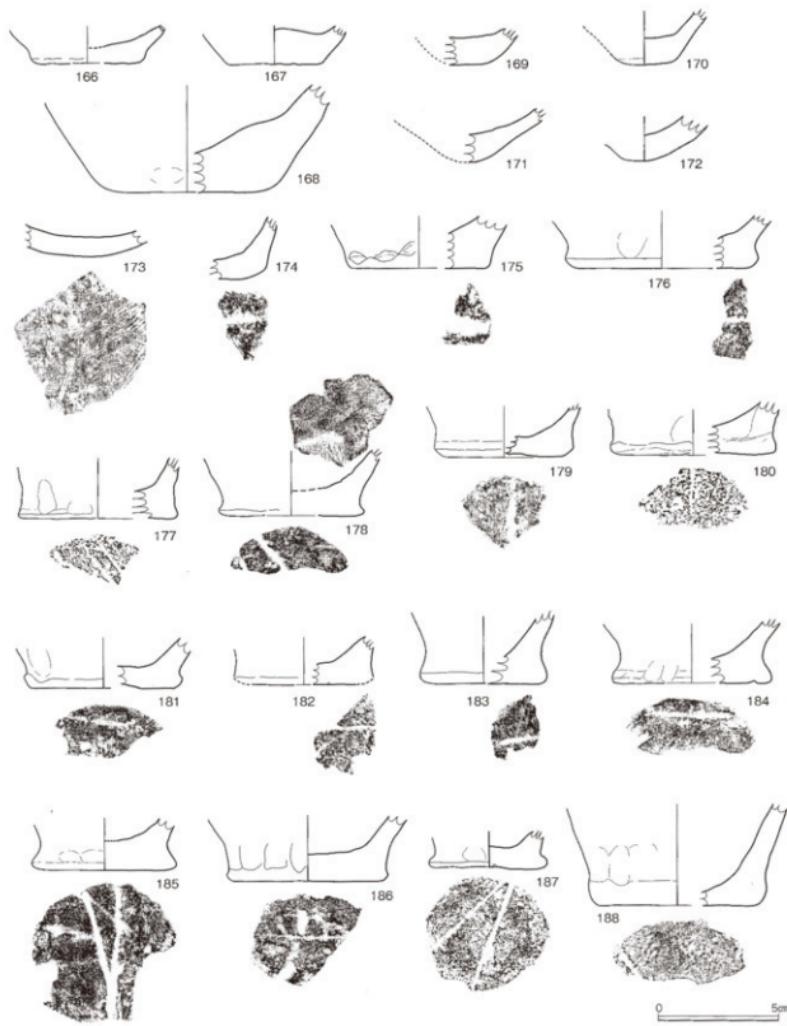
174はくびれが不明瞭である。175はくびれ部分に指オサエに加えて工具による刺突を施したような痕跡がみられる。178は内面に工具による調整痕がみられる。184は底厚が厚い個体である。197は工具による調整痕を残す。198~200は底径が小さい割に底厚が厚い一群である。174~189・198は底面に木葉痕が確認できる。

#### 底IV類 (第24図 173)

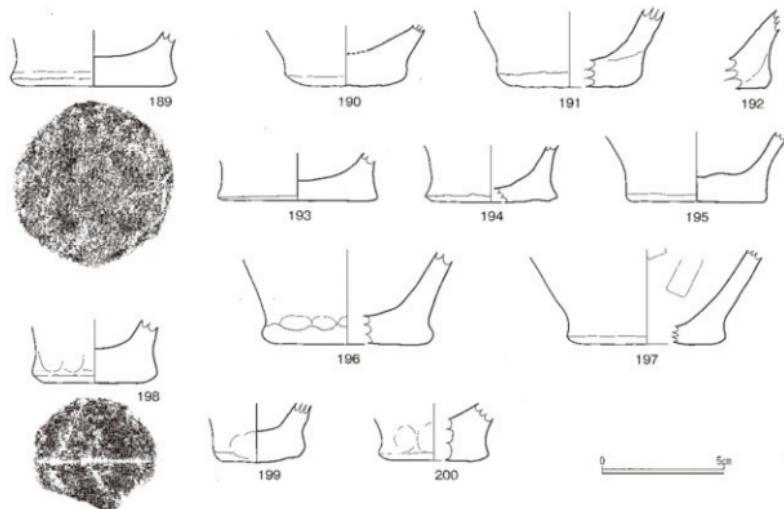
173は、底面が広くやや丸みを帯びた平底で、緩やかに胴部へと移行するものと考えられる。外面には調整痕が残る。胎土は白色鉱物粒がやや多く含まれる。焼成は良好である。

#### 石 器 (第26図・第27図)

201~204は石斧である。201は基部が欠損している。輝緑岩製である。正面には部分的に研磨が見られる。202は敲打整形後、部分的に研磨がなされている。刃部の研磨が著しい。輝緑岩製である。203は磨製石斧の刃部で、厚みがあり入念な研磨が施されている。輝緑岩製である。204は上下端部とも欠損しているが石斧の敲打整形がなされている。片麻岩製である。



第24図 第2文化層出土土器 (9)

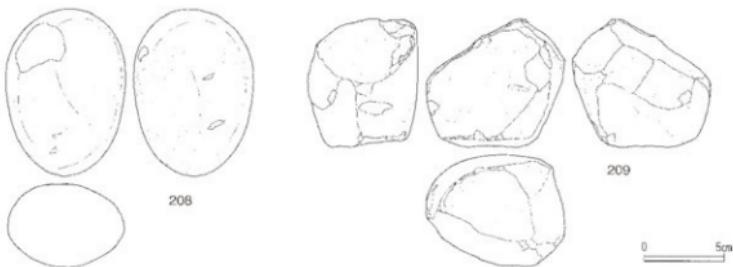
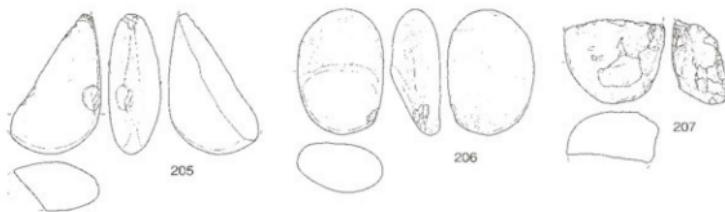
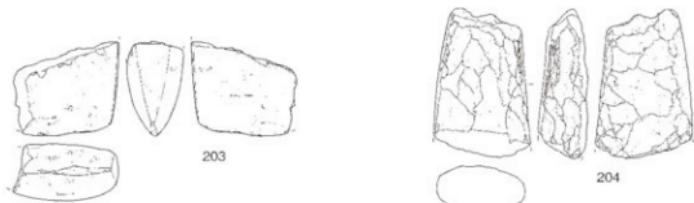
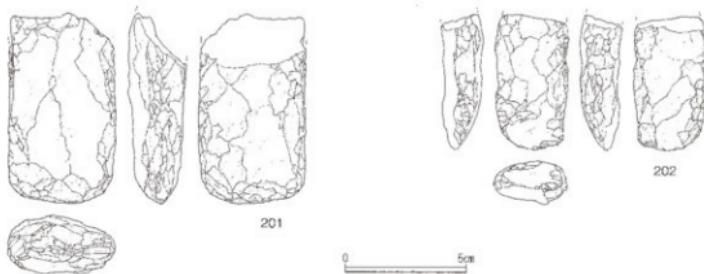


第25図 第2文化層出土土器(10)

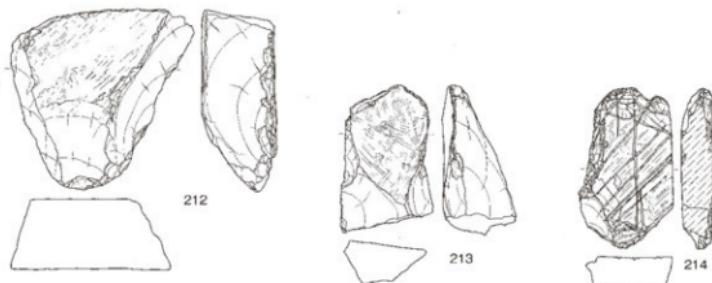
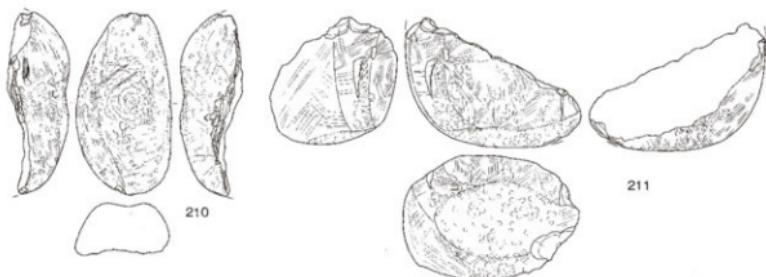
205～211は磨石・敲石・凹石類である。205は平面形態が略楕円形となる磨・敲石と考えられ、側面に敲打痕が残る。輝綠岩製である。206は円礫を使用した磨・敲石と考えられる。正面下部を中心に研磨がみられる。砂岩製で、長さ7.8cm、幅5.3cm、厚さ3.1cm、重量178.6gを計る。207は円礫を使用した磨・敲石と考えられる。途中で破損しており、下端・側面に敲打痕が残る。片麻岩製である。208は円礫を利用した平面形態が略楕円形となる磨・敲石である。正面に研磨がみられ、裏面、周縁部に敲打痕が残る。砂岩製で、長さ10.3cm、幅7.4cm、厚さ5.1cm、重量544gを計る。209は割れた礫を利用した磨・敲石と考えられる。正面に研磨がみられ、下面、上面には敲打痕が残る。210は凹石で、正面、側面に磨痕が見られる。正面には、敲打による凹みが形成されている。砂岩製である。211は円礫を使用した磨・敲石と考えられる。全面に研磨がみられ、下端を中心に敲打痕が残る。割れ口の縁辺部にも敲打痕が確認できることから、割れた後も利用されていた状況がうかがえる。花こう岩製である。

212～214は台石・石皿類である。212は台石で、正面に磨痕が残る。砂岩製で、長さ11.1cm、幅11.4cm、厚さ4.7cm、重量690gを計る。213は花こう岩を素材とした石皿の破片と考えられ、礫の傾斜面を利用して磨痕がみられる。214は砂岩の礫を利用した台石であり、正面に磨痕が残る。正面に確認できるスジは、人工的なものではないと考えられる。

215～216は砥石と考えられる。215は砂岩製である。礫の表裏面に磨研による溝が形成されている。216は砂岩製の円礫を使用し、表裏面に溝が形成されている。



第26図 第2文化層出土石器(1)



第27図 第2文化層出土石器(2)



第28図 第2文化層出土鉄製品

鉄製品（第28図）

217は刃物の先と推測されるもので、偏平な形状をしている。長さ6.9cm、幅2.25cm、厚さ0.8cmを計る。218は先細りの形状をなしている。用途は不明である。長さ7.6cm、幅1.8cm、厚さ1.1cmを計る。

第5表 第2文化層出土土器観察表(1)

探査番号	遺物番号	出土場所	層	分類	焼成度	勘定		色調		調査等		備考	
						分類	金雲母	高入	外	内	外表面	内部面	
						ア	△	赤褐	赤褐	赤褐・鉄灰・ナダ	ナダ	微細粒子	
	32	B 1	IV	Ⅲ-I類	○	A	△	赤褐	赤褐	赤褐・鉄灰・ナダ	ナダ	微細粒子	
	33	B 1	VI-VII	Ⅲ-I類	○	A	○	明赤褐	明赤褐	沈泥・鉄灰	ナダ	鐵錫砂粒 1mmの石炭 石の多く含む	
	34	B 2 d	VI-VII	Ⅲ-I類	○	A	○	橙	明赤褐	赤褐・鐵灰	ナダ	オサエ・ナダ	
	35	B 2 a	IV'	Ⅲ-II類	○	A	○	○	赤褐	明赤褐	オサエ	1~2mm程度の鉱物粉含む	
	36	B 1	IV	Ⅲ-III類	○	B	△	明褐	明褐	—	オサエ	混質	
	37	B 2 a	VIA	Ⅲ-III類	○	A	○	橙	橙	—	—	1~2mm程度の粒や少々 <含む	
	38	B 3 b	VII	Ⅲ-III類	○	A	○	橙	橙	オサエ	オサエ	1mm以下の粒子含む	
	39	C 1	VI-VII	Ⅲ-III類	○	A	△	赤褐	赤褐	赤褐	ナダ	白色の纏合む	
	40	B 1	IV	Ⅲ-III類	○	B	△	にぶい黄褐	にぶい黄褐	—	—	パウダー状	
	41	B 2	IV	Ⅲ-III類	○	B	△	橙	橙	—	ナダ	パウダー状	
16	42	C 1	VI-VII	Ⅲ-III類	○	A	○	赤褐	明赤褐	—	—	1~2mmの粒子多く含む	
	43	B 2	VI	Ⅲ-III類	○	A	○	明赤褐	明赤褐	—	—	鐵錫砂粒 1mm程度の 粒子少數含む	
	44	B 1	VI-VII	Ⅲ-III類	○	A	○	橙	橙	—	—	1mm粒多く含む、器 壁はがれ	
	45	B 4 c	IV'	Ⅲ-III類	○	A	△	墨褐	墨褐	オサエ	—	1~3mmの粒子含む	
	46	C 1	VI	Ⅲ-III類	○	B	△	黄褐	にぶい黄褐	ナダ	ナダ	—	
	47	B 2 b	VII	Ⅲ-IV類	○	A	○	明赤褐	明赤褐	ナダ	ナダ	1mm程度の砂粒多く含 む	
	48	B 1	VI-VII	Ⅲ-IV類	△	A	△	赤褐	赤褐	ナダ	ナダ	1~3mm程度の粒子少數 含む	
	49	B 2 a	VIC	Ⅲ-IV類	○	A	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	オサエ	オサエ	微細砂粒多く含む	
	50	B 1	VI-VII	Ⅲ-IV類	○	B	○	橙	橙	ナダ	オサエ・ナダ	赤褐色粒子少數含む	
	51	B 2 a	VIA	Ⅲ-V類	○	A	○	明赤褐	明赤褐	ナダ	—	1mm以下の粒子少數含 む	
	52	B 3 d	VII	Ⅲ-V類	○	A	○	明赤褐	墨褐	オサエ・ナダ・ 沈錫	—	ザラテラ	
	53	B 2 b	VI	Ⅲ-V類	○	A	○	褐	赤褐	鉄突	オサエ(多い)	—	
	54	B 2 b	VI	Ⅲ-V類	○	A	○	明赤褐	明赤褐	ナダ・鉄突	オサエ	—	
	55	C	VI-VII	Ⅲ-V類	○	B	△	橙	橙	ナダ	ナダ	黑色鉱物含む	
	56	B 3 a	VIA	Ⅲ-V類	○	A	○	赤褐	赤褐	—	オサエ・ナダ	微細砂粒主体	
	57	B 2 b	VII	Ⅲ-V類	○	B	△	橙	橙	ナダ	ナダ	薄手	
	58	B 1	VI-VII	Ⅲ-V類	○	A	○	橙	橙	鉄突	ナダ	微細粒子、1mm粒子の 少數含む	
18	59	C 1	VI	Ⅲ-I類	○	A	○	褐	にぶい褐	沈錫	ナダ	2~3mmの石炭石粒含む 赤褐色	
	60	B 1	IV'	Ⅲ-II類	○	A	○	橙	橙	沈錫	ナダ	1mm程度の白色粒子多 く含む	
	61	C 1	VI-VII	Ⅲ-II類	○	A	△	褐	褐	明突	ナダ	1mmの白色粒子多く含 む	
	62	B 3 c	Ⅲ-II類	○	A	△	○	明赤褐	明赤褐	明突	—	1mmの白色粒子含む	
	63	C 1	VI-VII	Ⅲ-II類	○	A	○	橙	橙	明突	—	1mmの白色粒子多く含 む	
	64	B 2 b	VII	Ⅲ-II類	○	A	△	赤褐	赤褐	ナダ・鉄突	オサエ・ナダ・ 内部粘土接合痕	1mm以上白粒子多く含む	
19	65	B 2	IV	Ⅲ-III類	○	A	○	明赤褐	明赤褐	—	ナダ	—	
	66	B 4 a	IV'	Ⅲ-III類	○	A	○	橙	明赤褐	—	—	—	
	67	C 3	VI-VII	Ⅲ-III類	○	A	○	明赤褐	明赤褐	ナダ(丁寧)	ナダ(丁寧)	—	

第5表 第2文化層出土土器観察表(2)

測定番号	出土場所	層	分類	集成	胎上		色調		調査等		備考
					分類	金賞品	國入	外	内	外器面	内器面
19	68 C 3 s		甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	ナダ	1~3mmの粒物多く含む	
	69 B 2 d	VII	甕III類	○ A	○ ○	暗赤褐色	赤褐色	ナダ・刺突	—	微細砂粒 1mm程度の粒子少く含む	
	70 B 1	IVア	甕III類	○ A	△ ○	明赤褐色	明赤褐色	ナダ	ナダ	1mm程度の白色粒子多く含む	
	71 B 1	IVア	甕III類	△ B	△	橙	橙	—	—	やや泥質・もろい	
	72 B 1	IV上	甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナダ	オサエ・ナダ	1~2mmの粒物多く含む	
	73 B 1	IV上	甕III類	○ A	△	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	オサエ		
	74 B 2	IV	甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	ナダ	ナダ	1mm粒子含む 3mmの粒子少く含む	
	75 B 2	IV	甕III類	○ A	○	橙	橙	ナダ?	—	1mm程度の粒物多く含む	
	76 B 2	IV	甕III類	○ A	○	橙	橙	—	—	微粒子多く含む	
	77 B 1	IV上	甕III類	○ A	○ ○	橙	橙	—	—	1mm程度の砂粒多く含む	
	78 B 1	IVア	甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	ナダ	ナダ	微細粒子	
	79 B 2 a	VI-C	甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	—	オサエ	1mm以下の微細砂粒	
	80 B 1	VI-VII	甕III類	○ A	○	橙	橙	—	—	1mm程度の粒子含む	
	81 B 1	IV'	甕III類	○ B	△ △	明赤褐色	明赤褐色	—	ナダ	泥質	
	82 B 1	VI-VII	甕III類	○ A	△ ○	橙	明褐色	—	—	1mm程度の粒子多く含む	
	83 C 1	VI-VII	甕III類	○ A	○	赤褐色	褐	ナダ	ナダ(丁寧)	微細粒子	
	84 C 3	VI-VII	甕III類	○ A	○	赤褐色	赤褐色	オサエ	ナダ	微細粒子	
	85 B 2 b	VII	甕III類	○ A	○ ○	にぶい赤褐色	赤褐色	ナダ	ナダ	0.5~2mm程度の白色粒子多く含む	
	86 B 2	VII	甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	ナダ	ナダ	微細砂粒 1mm程度の粒子含む	
	87 C 1	VI-VII	甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	ナダ	オサエ	2~3mmの粒子多く含む	
	88 B 3 s		甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	ナダ	オサエ	1~2mmの粒子含む	
	89 C 1	VI-VII	甕III類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	ナダ	オサエ・ナダ	灰色系平粒子含む	
20	90 B 2 d	VI-VII	甕IV類	△ A	○	明赤褐色	赤褐色	—	オサエ	1mm程度の白色粒	
	91 B 3 a	VI-A	甕IV類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	—	微細砂粒 1mm以下の粒子少く含む	
	92 C 2	VI-VII	甕IV類	○ A	○	橙	橙	ナダ	オサエ		
	93 B 1	IVア	甕IV類	○ A	○	明褐色	明褐色	オサエ	ナダ	1~2mmの粒子含む	
	94 C 2	VI-VII	甕IV類	○ A	○	明褐色	明褐色	—	オサエ	白色粒物多く含む	
	95 B 3	VII	甕IV類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	オサエ		
	96 B 1	VI-VII	甕IV類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナダ	オサエ・ナダ	1mm程度の砂粒多く含む	
	97 B 2 a	VI-C	甕IV類	○ A	○	明褐色	明褐色	—	—	微細砂粒	
	98 B 3 a	VII	甕IV類	○ A	○	橙	にぶい黄褐色	オサエ	ナダ		
	99 C 2	VI-VII	甕IV類	○ A	○	明赤褐色	橙	オサエ・ナダ	オサエ	1~3mmの粒物含む	
	100 C 2	VI-VII	甕IV類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナダ	オサエ	1mmの扁平粒物含む	
	101 B 1	IV A	甕IV類	○ A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	—		
	102 B 2 c	VII	甕V類	○ A	○	橙	明赤褐色	—	—	微細粒子主体	
	103 C 1	VI-VII	甕V類	○ A	△ △	明褐色	明褐色	ナダ	オサエ	やや泥質	

第5表 第2文化層出土土器観察表(3)

探査番号	遺物番号	出土場所	層	分類	葉痕	底成形	鉢		色調		調査等		備考
							分類	金鑑合	銹入	外	内	外表面	内表面
20	104	B 4	IV	甕V類		○ A △	○	暗灰黄	にぶい黄緑	—	ナゲ		
	105	B 1	IV'	甕V類		○ A △	○	にぶい緑	明赤褐	ナゲ	オサエ・ナゲ		
	106	B 1	VI-VII	甕V類		○ A ○	○	黒褐	黒褐+明赤褐	ナゲ・オサエ・白	ナゲ	微細砂粒 1mm程度の粒子含む	
	107	B 4 b	VI	甕VI類		○ A	○	明赤褐	明赤褐	ナゲ	オサエ		
	108	B 1	IV	甕VI類		○ A	○	明赤褐	明赤褐	—	—		
	109	B 2 b	VI	甕VI類		○ A ○	○	明赤褐	にぶい黄緑	—	オサエ	1mmの白色粒子含む	
	110	C 1	VI-VII	甕VI類		○ A ○	○	明赤褐	明赤褐	オサエ	オサエ	1~2mmの扁平粒子多く含む	
	111	B 2	VI	甕VI類		○ A ○	○	明赤褐	明赤褐	オサエ	オサエ	1~2mm程度の粒子多く含む	
	112	B 1	IV A	甕VI類		△ A	○	明赤褐	明赤褐	ナゲ	オサエ	2mm程度の粒子多く含む	
	113	B 4 d	VI-VII	甕VII類		○ B △	△	黄褐	明赤褐	刻目・縦帶	ナゲ	斑質	
	114	B 2 b	VI	甕VII類		○ A △	○	明赤褐	明赤褐	刻目・縦帶	オサエ		
21	115	B 2 b	VI	甕VII類		○ A △	○	にぶい褐	にぶい褐	刻目・縦帶	オサエ		
	116	B 2 s	VI	甕VII類		○ A △	○	黒褐	褐	刻目・縦帶	ナゲ		
	117	C 1	VI-VII	甕VII類		○ A △	○	明赤褐	明赤褐	刻目・縦帶	ナゲ		
	118	B 3 a	VII	甕VIII類		○ A △	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	刻目・縦帶	ナゲ		
	119	C 1	VI-VII	甕VIII類		○ A	○	にぶい赤褐	褐	ナゲ・剥突	ナゲ		
	120	B 2 b	VII	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	明赤褐	ナゲ・剥突	ナゲ		
	121	B 2 b	VI	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	赤褐	剥突	オサエ		
	122	B 2 b	VI	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	明赤褐	剥突	オサエ		
	123	B 3 d	VI	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	褐	ナゲ・剥突(丁寧)	ナゲ		
	124	C 1	VI-VII	甕VIII類		△ A	○	褐	明赤褐	剥突	—	砂礫・扁平粒子含む	
	125	B 2 b	VI	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	明赤褐	剥突	オサエ		
	126	B 2 b	VI	甕VIII類		○ A △	○	明赤褐	明赤褐	剥突	ナゲ		
22	127	B 1	IV	甕VIII類		○ A △	○	明赤褐	黒褐	剥突	ナゲ	白色粘物多く含む	
	128	B 2 b	VI	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	明赤褐	剥突	ナゲ		
	129	B 4	IV	甕VIII類		○ A △	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナゲ・剥突	—		
	130	C 1	VI-VII	甕VIII類		○ A	○	椎	にぶい褐	ナゲ・剥突	オサエ		
	131	C 1	VI-VII	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	椎	ハケメ・剥突・沈縮	ハケメ		
	132	B 2 b	VII	甕VIII類		○ A △	○	黒褐	明赤褐	ナゲ・剥突	オサエ		
	133	C 2	IV	甕VIII類		○ A △	○	明赤褐	灰褐	ナゲ・剥突	ナゲ	微細砂粒	
	134	B 2 b	VI	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	明赤褐	剥突	オサエ		
	135	B 5	VI-VII	甕VIII類		○ A	○	赤褐	にぶい赤褐	ナゲ・剥突	ナゲ	微細砂粒 1mm以下の粒子多く含む	
	136	C 1	VI-VII	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	明赤褐	沈縮	—	2mm程度の扁平粘物含む	
	137	B 2 s	VI	甕VIII類		○ A	○	黒灰	明赤褐	剥突	ナゲ		
	138	B 2 s	VI	甕VIII類		○ A	○	明赤褐	椎	剥突	オサエ		
	139	B 4 a	IV'	甕VIII類		○ A	○	椎	椎	剥突	オサエ・ナゲ		

第5表 第2文化層出土土器観察表(4)

井戸番号	出土場所	層	分類	集成 成形 施設	出土		色調		調整等		備考
					分離	全表面	高	外	内	外表面	
					入						
21	B 2 b	VII	甕埴類	○ A △ ○	に赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	ナゲ			
	B 2 a	IV	甕埴類	○ A ○	灰褐色	黑褐色	オサエ・ナゲ・ 剥落	オサエ・ナゲ (丁寧)	1~3mmの紅色粒多く含む (+) 條合痕		
22	B 3 c	IV'	甕埴類	○ A ○	明赤褐色	赤褐色	ナゲ	ナゲ	1~2mmの紅色粒含む		
	B 3 c	IV'	甕埴類	○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナゲ	オサエ・ナゲ	2~3mmの紅色粒含む		
	B 2 b	VII	甕埴類	○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	ナゲ	ナゲ	オサエ・ナゲ		
	B 1	IV上	甕埴類	○ A ○	明赤褐色	黑褐色	オサエ・ナゲ	ナゲ			
	C 1	VI~VII	甕埴類	○ A ○	明赤褐色	に赤褐色	T.高ナゲ	オサエ			
	B 4 b	VI	甕埴類	○ A △ ○	黒褐色	明赤褐色	ナゲ (丁寧)	ナゲ (丁寧)			
	B 2	VI	甕埴類	○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナゲ	オサエ	0.5~1mmの粒子含む		
	B 2 b	VII	甕埴類	○ A ○	赤褐色	明赤褐色	ナゲ	ナゲ			
	B 1	IV	甕埴類	○ A ○	赤褐色	明赤褐色	ナゲ	オサエ	微細粒多く含む		
	B 1	VI~VII	甕埴類	○ A ○	赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナゲ	オサエ・ナゲ	比較的少ない 接合痕		
	B 1	IV上	甕埴類	○ A ○	に赤褐色	に赤褐色	オサエ・ナゲ	オサエ・ナゲ	微細粒多く含む		
	C 1	VI~VII	甕埴類	△ A ○	赤褐色	赤褐色	—	—	2mm程度の紅色粒多く含む		
	B 4 d	VI~VII	甕埴類	○ A ○	明赤褐色	黄褐色	ナゲ	オサエ・ナゲ	1mm程度の紅色 粒多く含む		
23	B 1	VI~VII	甕X類	○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	ナゲ・回線	オサエ	微細粒 2~3mmの紅色 粒少多含む		
	C 1	VI~VII	甕X類	○ A △ ○	赤褐色	に赤褐色	ナゲ・新突	オサエ	1mmの白色粒多く含む		
	B 2	VII	甕X類	△ A ○	明赤褐色	明赤褐色	—	—	角打ち 0.5~1mmの白 色粒多く含む		
	C 3 s	—	甕X類	○ A ○ ○	赤褐色	赤褐色	—	オサエ	紅色粒含む 1mmの紅色 粒多く含む		
	B 2	IV	甕X類	○ A ○	△ 明赤褐色	明赤褐色	ナゲ	オサエ	微粒子 横粒突		
	C 1	VI~VII	甕X類	○ B ○	△ に赤褐色	に赤褐色	ナゲ・突起	オサエ・ナゲ			
	B 1	VI~VII	甕X類	○ A △ ○	赤褐色	明赤褐色	ナゲ・沈降	ナゲ	1mm程度の紅色 粒多く含む		
	B 3	IV'	糸口類	○ B ○	△ 褐	褐	—	ナゲ	糸目・隙隙		
	II	—	糸口類	△ A △ ○	明赤褐色	赤褐色	ナゲ	オサエ・ナゲ	0.5~1mmの紅色 粒多く含む		
	B 2	VI	糸口類	○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	ナゲ?	オサエ・ナゲ	0~1mmの紅色 粒含む		
	B 4 b	VI	糸口類	○ A ○	明赤褐色	褐	—	オサエ			
24	B 1	VI~VII	底上類	○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	—	—	1mm以下の紅色 粒多く含む		
	B 2	IV	底上類	○ A ○ ○	赤褐色	赤褐色	—	オサエ	1~2mm以下の白色 粒含む		
	C 2	VI~VII	底上類	○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	オサエ	3mmの紅色粒含む		
	B 2 a	IV	底上類	○ A ○	明赤褐色	赤褐色	オサエ	オサエ	つぶれた尖底		
	B 3 b	VII	底上類	○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	—	—	微細粒 多く含む 粉っぽい		
	B 3 a	VI A	底上類	○ A ○	明赤褐色	赤褐色	—	ナゲ	1mm以下の白色 粒含む		
	B 2	IV	底上類	○ B ○	△ 褐	褐	—	オサエ	微細粒		
	B 3 d	VII	底上類	○ A △ ○	明赤褐色	褐	ハケメ	オサエ・ナゲ	黑色斑点紅色 粒含む		
	B 5	IV	底上類	○ ○ A ○	明赤褐色	明赤褐色	—	—	1~6mmの紅色 粒少多含む		
	B 4	IV	底上類	○ △ A ○	赤褐色	赤褐色	—	—	1mmの白色 粒多く含む (+)		

第5表 第2文化層出土土器観察表(5)

擇別番号	遺物番号	出土場所	層	分類	始士			色調		調整等		備考	
					焼成	金属性	混入	外	内	外器面	内器面		
24	176	C 1	VI-VII	底凹型	○	○	B	△	○ 明褐色	褐	オサエ	オサエ	
	177	B 4 a	IV'	底凹型	○	○	A	○	赤褐色	赤褐色	オサエ	オサエ・ナダ	微細砂粒多く含む
	178	B 2	VI	底凹型	○	○	A	△	○ 明赤褐色	明赤褐色	オサエ・工具ナダ	工具ナダ	微細砂粒主体
	179	B 1	IV上	底凹型	○	○	A	△	程	褐	オサエ	オサエ	
	180	B 4 c	IV'	底凹型	○	○	B	○	○ 程	に赤い黄褐色	オサエ・ナダ	オサエ・ナダ	1mm程度の粒子含む やや粉っぽい
	181	B 2 d	IV'	底凹型	○	○	A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	—	
	182	A 3	W	底凹型	○	○	A	△	○ 程	に赤い赤褐色	オサエ	—	微細砂粒 1mm程度の 粒子含む
	183	B 2	VII	底凹型	○	○	A	○	明赤褐色	明赤褐色	—	—	微細砂粒・白粒
	184	B 1	IV上	底凹型	○	○	A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	ナダ	葉状?
	185	B 2 b	IV	底凹型	○	△	A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	—	
	186	B 3 d	IV'	底凹型	○	○	A	○	赤褐色	赤褐色	オサエ	—	
	187	C 2	IV	底凹型	○	○	A	○	程	程	オサエ	オサエ	扁平軸物少量含む
	188	C 1	VI-VII	底凹型	○	○	A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ・ナダ	—	
	189	B 3 d	VII	底凹型	○	○	A	○	明赤褐色	赤褐色	オサエ	オサエ	
	190	B 4 d	VI-VII	底凹型	—	○	A	△	程	程	オサエ	—	微細粒子
	191	B 4 a	IV'	底凹型	—	○	A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	オサエ・ナダ	微細砂粒+1mm程度の 粒子含む
	192	B 4	IV	底凹型	○	○	A	○	赤褐色	赤褐色	オサエ・ナダ	ナダ	
	193	B 4 b	VI	底凹型	—	○	A	○	程	程	ナダ	オサエ・ナダ	
	194	B 4 + 5	IV	底凹型	○	○	A	○	程	程	ナダ	ナダ	
25	195	C 1	VI-VII	底凹型	—	○	B	△	程	程	ナダ	ナダ	斑質
	196	B 2 d	IV'	底凹型	—	○	A	△	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	ナダ	
	197	C 4 n	IV	底凹型	不	○	A	○	赤褐色	赤褐色	オサエ	ハケメ	
	198	B 3 a	VII	底凹型	○	○	A	○	明赤褐色	明赤褐色	オサエ	—	
	199	B 3 c	VII	底凹型	—	○	A	○	赤褐色	赤褐色	オサエ	オサエ	
	200	C 2	VI-VII	底凹型	—	○	B	△	程	程	オサエ	—	斑質

第6表 第2文化層出土石器計測表

捕獲番号	遺物番号	出土場所	器種	石材	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
26	201	B 2 a	石斧	輝緑岩	IV	(7.8)	(4.5)	(2.4)	(124.6)
	202	C 1	石斧	輝緑岩	VI-VII	(5.6)	(3.1)	(1.8)	(44.1)
	203	B 4 d	石斧	輝緑岩	VI-VIII	(5.8)	(6.5)	(3.5)	(183.4)
	204	B 3	石斧	片麻岩	VII	(9.2)	(6.0)	(3.1)	(246.0)
	205	C 1	磨・敲石	輝緑岩	VI-VIII	(8.6)	(5.6)	(3.2)	(155.9)
	206	B 3 b	磨石・敲石	砂岩	VI-VIII	7.8	5.3	3.1	178.6
	207	B 3	磨石・敲石	片麻岩	VII	(5.1)	(6.3)	(3.5)	(144.6)
	208	C 2	磨・敲石	砂岩	VI-VIII	10.3	7.4	5.1	544.0
	209	B 4 b	磨石・敲石	砂岩	VII	7.9	8.6	6.8	600.0
	210	B 4 a	凹石	砂岩	IV'	(11.2)	5.9	(3.8)	(300.0)
27	211	C 3	磨石	花こう岩	VI-VIII	(7.9)	(11.0)	(7.9)	(570.0)
	212	C 2	台石	砂岩	VI-VIII	11.1	11.4	4.7	690.0
	213	B 2 d	石皿	花こう岩	VI-VIII	9.2	5.8	4.7	291.6
	214	B 3	台石	砂岩	VII	9.9	5.9	1.9	157.2
	215	B 2 a	砥石	砂岩	VII	(5.0)	(3.5)	(1.3)	(24.6)
	216	C 2	砥石	砂岩	IV	2.7	3.2	1.4	13.2

※欠損部分がある場合は( )書き

第7表 第2文化層出土鉄製品計測表

捕獲番号	器種	出土場所	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
28	217 不明	B 3 c	IV' F'	6.90	2.25	0.80
	218 不明	B 3 c	IV' F	7.60	1.80	1.10

## 自然遺物（第8表）

### 脊椎動物骨遺体

脊椎動物骨遺体については、ピックアップ法（現地採集資料）により得られたものについて種の同定を行った。その結果、魚類・爬虫類・哺乳類が確認された。

### 貝類遺体（第9表）

貝類遺体についても、ピックアップ法（現地採集資料）により得られたものについて種の同定を行った。その結果、海産腹足類14科24種、海産二枚貝類6科7種、陸産貝類2科2種が確認された。脊椎動物骨遺体・貝類遺体とともに第2文化層からの出土であった。

#### 《参考文献》

- 岡本一志 1988 『沖縄海中生物図鑑』第4巻 新星図書出版  
岡本一志 1988 『沖縄海中生物図鑑』第5巻 新星図書出版  
黒住耐二 2006 「貝類遺体からみた沖永良部島住吉貝塚の特徴」『住吉貝塚』知名町教育委員会  
黒住耐二 2009 「沖永良部島友留遺跡から得られた貝類遺体」『友留遺跡』知名町教育委員会  
樋泉岳二 1994 「遺跡差魚骨同定の手引き（I）：同定に考え方と手順」『動物考古学』第2号 動物考古学研究会  
樋泉岳二 1995 「遺跡差魚骨同定の手引き（II）－魚類の骨格構成と同定部位－」『動物考古学』第5号 動物考古学研究会  
樋泉岳二 2006 「魚類遺体群からみた住吉貝塚の特徴と重要性」『住吉貝塚』知名町教育委員会  
樋泉岳二 2009 「友留遺跡から出土した脊椎動物遺体群」『友留遺跡』知名町教育委員会  
西中川 駿 2006 「知名町住吉貝塚出土の動物遺体」『住吉貝塚』知名町教育委員会  
松井 章 編 2006 『動物考古学の手引き』 奈良文化財研究所理叢文化財センター  
行田義三 2000 『鹿児島の貝』 春苑堂出版

第8表 捕獲遺跡検出脊椎動物遺体一覧表

軟骨魚綱（板鰓亜綱）	Chondrichthyes (Elasmobranchii)
サメ類	Galeomorphi
硬骨魚綱（真骨類）	Osteichthyes (Teleostei)
ベラ科（タキベラ型）	Labridae cf. "Bodianus perdito"
ベラ科	Labridae
ブダイ属	<i>Calotomus</i>
イロブダイ属	<i>Bolbometopon</i>
アオブダイ属	<i>Scarus</i>
ハリセンボン科	Diodontidae
ヘダイ亞科	Sparinae
ニザダイ科	Acanthuridae
爬虫綱	RRPTILIA
ウミガメ類	Cheloniidae
哺乳綱	
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>

第9表 掘殿遺跡検出貝類遺体一覧表

腹足綱	Gastropoda	生息場所類型
アツキガイ科	Muricidae	I
ツノレイシガイ	<i>Mancinella tuberosa</i>	I-3-a
シラクモカイ	<i>Thais (Stramonita) armigera</i>	I-3-a
アカイガレイシ	<i>Drupa rubidae</i>	I-3-a
キマダライガレイシ	<i>Drupa ricina (Linnaeus)</i>	I-3-a
ムラサキイガレイシ	<i>Drupa morum Roding</i>	I-3-a
シロレイシガイダマシ	<i>Drupa albolabis</i>	I-3-a
キイロイガレイシガイ	<i>Drupa (Drupina) glossularia Roding</i>	I-3-a
レイシガイダマシ	<i>Muricodrupa (Tenguella) granulata (Duclos)</i>	I-3-a
アマオブネ利	Neritidae	I-0-a
イトマキボラ科	Fasciolariidae	I-2-a
リュウキュウツノマタガイ	<i>Latirus polygonus (Gmelin)</i>	I-2-a
イモガイ科	Conidae	I
アンボンクロザメガイ	<i>Conus (Lithocoonus) litteratus</i>	I-2-c
マダライモカイ	<i>Virroconus ebreaus (Linnaeus)</i>	I-1-a
オキニシ科	Bursidae	I
オキニシ	<i>Bursa bufofis dunkeri</i>	I-3-a
オニコブシガイ科	Vasidae	I
コオニコブシ	<i>Vasum turbinellum</i>	I-3-a
オニノツノガイ科	Cerithiidae	I
オニノツノガイ	<i>Cerithium (s.s.) modulosum</i>	I-2-c
スイショウガイ科	Strombidae	I
マガキガイ	<i>Strombus (C.) luhuanus</i>	I-2-c
カラガイ科	Cypraeidae	I
ハナマルユキ	<i>Cypraea (R.) caputserpentis</i>	I-3-a
ヤクシマダカラ	<i>Cypraea (Arabica) arabica</i>	I-2-a
ハチジョウタカラガイ	<i>Mauritia mauritiana</i>	I-3-a
キイロタカラ	<i>Cypraea (M.) moneta</i>	I-1-a
ニシキウズガイ科	Trochidae	I
ニシキウズガイ	<i>Trochus (s.s.) maculatus</i>	I-2-a
サラサテイラ	<i>Trochus (Rochia) nioticus</i>	I-4-a
フデガイ科	Mitridae	I
フジツガイ科	Ranellidae	I
ミツカドボラ?	Turbinidae	I-2-a
リュウテン科	<i>Cymatriton nicobaricum?</i>	I
チョウセンサザエ	<i>Turbo (Marmorostoma) argyrostoma Linnaeus</i>	I-3-a
チョウセンサザエ(フタ)	<i>Turbo (Marmorostoma) argyrostoma Linnaeus (opercula)</i>	I-3-a
ヤコウガイ	<i>Turbo (Lunaria) marmoratus</i>	I-4-a
ヤコウガイ(フタ)	<i>Turbo (Lunaria) marmoratus (operculum)</i>	I-4-a
海産腹足類不明	unknown (marine gastropods)	
オナジマイマイ科	Bradybaenidae	V
エラブマイマイ	<i>Nesiohelix irrevivida</i>	V-8
キセルガイ科	Clausiliidae	V
オキノエラブギセル	<i>Nesiophaedusa okinoerabuensis</i>	V-8
陸産腹足類不明	unknown (Terrestrial Gastropoda)	
二枚貝綱	Bivalvia	生息場所類型
フネガイ科	Arcidae	I
リュウキュウサルボオ	<i>Anadara (s.s.) antiquata</i>	I-2-a
イガイ科	Mitilidae	I
リュウキュウヒバリガイ	<i>Modiolus auriculatus</i>	I-1-a
リュウキュウヒバリガイ?	<i>Modiolus auriculatus?</i>	I-1-a
シャコガイ科	Tridacnidae	I
シラナミ	<i>Tridacna maxima</i>	I-2-a
シャコウガイ	<i>Hippopus hippopus</i>	I-2-c
ヒレジャコ	<i>Tridacna squamosa</i>	I-2-a
リュウキュウマスオガイ科	Asaphidae	II-1-c
リュウキュウマスオガイ?	<i>Asaphis violascens</i>	II-1-c
マルスダレガイ科	Tellinidae	I
アラヌメガイ	<i>Periglypta reticulata</i>	I-1-c
フデガイ科	Mitridae	I
二枚貝不明	unknown (marine bivalves)	

生息場所類型 (Habitat)

I:外洋　さんご礁域　II:内浦～転石域　III:河口干潟～マングローブ域　IV:淡水域　V:陸域　VI:その他の

O:潮間帯上部(Iではノッチ、IIではマンゴローブ)　1:潮間帯中・下部　2:潮間帯上縁部(Iではイノー)

3:干涸(1のみ適用)　4:礁斜面及びその下部　5:底水　6:流水　7:林内　8:林内・林縁部　9:林縁部　10:海岸部

a:岩礁・岩盤　b:転石　c:礁/砂/泥底　d:植物上　e:淡水の流入する隙底

## 第5章 総括

### 第1節 揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付け

瀬戸内町教育委員会 鼎 丈太郎

#### 1.はじめに

平成22年、兼久式土器を大量に出土した小湊フワガネク遺跡群が国指定史跡に指定された。兼久式土器は、奄美群島特有の在地土器であり、ヤコウガイ大量出土遺跡において出土している土器も大半が兼久式土器である。当該時期の奄美群島は、ヤコウガイの大量集積、貝匙製作、鉄器の使用、ヤコウガイ交易や階層社会の出現の可能性など、奄美群島の古代史を大きく塗り替えうる可能性を持っている。しかし、これらの遺跡が全国的に注目を浴びている一面、兼久式土器は未だ不明な点が多い。

揚殿遺跡から出土したくびれ平底土器も、兼久式土器もしくはこの系譜に帰する資料であると考えられる。しかし、小湊フワガネク遺跡群やマツノト遺跡で出土した兼久式土器とは、相違する点があり、今までの兼久式土器研究において、その位置付けを決めるには困難な資料である。また、当該資料は、沖縄のアカジャヤンガー式・フェンサ下層式土器との類似点も少なくない。

そこで、兼久式土器の研究状況を確認した上で、沖縄の研究状況とも比較しながら揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付けを検討したい。

#### 2.兼久式土器の定義

河口貞徳氏が、奄美群島出土土器の編年を行う際、伊仙町面繩第三貝塚（当時兼久貝塚）から発見された出土土器を標式として「兼久式土器」と名付け、設定したのが兼久式土器の始まりである。

河口氏は、沖縄県出土の類似土器との比較から、兼久式土器の特徴として「平底の底部に木葉圧痕があり、頸部に縦縄凸帯をめぐらせる（縦位方向の凸帯あり）。沈線文は鋸歯文を基本とし、直線的である。口唇部に刻目を施す。単独遺跡を形成する。石斧を伴わない。」ことを示している（河口 1974）。この河口氏の論文で初めて兼久式土器の名称が示され、その特徴や年代がおおまかながら定義付けられた。この名称は、今日まで使用されている。

河口氏が定義付けを行った後、発掘調査において、河口氏が設定した兼久式土器の定義に合致しない新資料が相次いで発見されたが、これら新資料の取扱いは、研究者により様々である。

#### 3.兼久式土器の研究略史

兼久式土器は、奄美群島に広く分布している土器である。砂丘遺跡から出土しており、器

形は甕形土器と壺形土器で構成され、大半が甕形土器である。底部に木葉压痕を有する事が一番の特徴だが、木だに判然としない部分が多い土器である。そこで、ここでは兼久式土器の先行研究を整理してみたい。

1930年、広瀬祐良氏・小原一夫氏が徳之島の伊仙町にある面縄第一貝塚を調査した際に、発見したのが兼久式土器の初見であるが（中山 1994）、兼久式土器の名称自体は、前述した通り、1974年に河口貞徳氏が奄美諸島の土器の型式設定を行う際、伊仙町面縄第三貝塚（当時兼久貝塚）から発見された出土土器を「兼久式土器」と名付けたのが始まりである。「石斧を伴わないこと」、「弥生式土器の終末期の従属遺跡の土器の影響で底部に木葉压痕をもつこと」から、兼久式土器の年代を弥生時代後期と推定している（河口 1974）。この論文で初めて兼久式土器との名称が示され、兼久式土器の特徴や年代がおおまかながら設定された。

その後、喜瀬・サウチ遺跡（河口 1978）、面縄第1・第2貝塚（牛ノ浜・堂込 1983）、須野・コビロ遺跡（熊本大学〈内山〉1983）、辺留・ベルクボ遺跡（熊本大学〈松原〉1983）、須野・アヤマル第2貝塚（池畠 1984）、和野・長浜金久遺跡（弥栄 1984・1987・1995）、方屋・泉川遺跡（立神 1986）、先山遺跡（戸崎・長野 1987）など多くの発掘調査が実施され、壺形土器が存在することや、開元通宝と共に伴することが確認された。また、成川式土器の影響や兼久式土器の中にスセン當式土器が含まれている可能性がある点が指摘された。

年代については、弥生時代後期頃から平安時代と「かなり息の長い土器である」という意見や、古墳時代から平安時代という意見など研究者により様々であった。また、兼久式土器とアカジャンガ一式・フェンサド層式土器との関係や南九州の弥生式土器との比較検討の必要性多くの研究者が指摘している。

なお、兼久式土器を用いた時期の遺跡は、出土地点の大半が砂丘地であり、單一層の小規模遺跡を形成し、定住しなかったと推測されていた。

1991年、笠利町教育委員会が実施した上盛・マツノト遺跡の発掘調査では、それまでの兼久式土器を出土する遺跡と比較すると画期的な成果があった。

「兼久式土器などの出土遺物が今までの遺跡とは比較にならないほど大量に出土した」、「白砂屑を挟み上下二層の文化層（兼久式土器主体）が存在する」、「共伴遺物が量・種類ともに多く、出土した共伴遺物を羅列すると、上師器・須恵器・水引き椀・鉄製品・銅製品・ガラス製管玉・雁股状の鉄鏃・貝製品・貝小玉・土製品・フイゴの羽II・鼎型土器などそれまでの兼久式土器を出土する遺跡では見られなかった共伴遺物が多数出土」（中山 1992b）。

特に注目すべき成果として、兼久式土器が上下二層に分かれて出土している点があげられる。この成果から、兼久式土器研究で初めて層位学的研究が行えるようになった。中山氏は、上盛・マツノト遺跡の文化層について出土遺物などから時代を設定し、上層の文化層を7～8世紀代、下層の文化層を弥生時代後期としている（中山 1995b）。また、土盛・マツノト遺跡の成果を基にシンポジウムも開催されている。

土盛・マツノト遺跡シンポジウムの後、笠利町教育委員会と熊本大学文学部考古学研究室は、用・ミサキ遺跡をたびたび発掘調査しており、大量の兼久式土器や注目される共伴遺物が確認されている（笠利町教育委員会 1995b、熊本大学文学部考古学研究室 1995・1996・1997）。

笠利町教育委員会と熊本大学は、兼久式土器の文様を主体として、分類を実施している。

用・ミサキ遺跡での注目される点は、兼久式土器に先行する土器としてXVI層出土の土器がある。この土器について、高梨氏は沖永良部のスセン當式土器の可能性を指摘している(高梨 1999a)。また、共伴遺物として、貝札(広田上層式)が兼久式土器と共にすることが初めて確認されたことがあげられる。貝札は、多くの研究者が兼久式土器編年の指標としており、この発見がいかに重要であるかが理解できる。そして、兼久式土器と開元通宝との共伴も注目される。開元通宝との共伴関係は、面繩第一貝塚でも共伴の可能性が指摘されている。

1997年、名瀬市教育委員会により発掘調査が実施された小湊フワガネク遺跡群は、遺構・遺物ともに重要な成果をあげた。1999年には、シンポジウムも開催されている。

「遺跡の規模が広大であり、出土遺物の数量が膨大である」、「出土遺物の種類が豊富である(兼久式土器・隆帶文を二条廻らせる土器・土師器・土師器模倣土器・滑石・滑石混入土器・カムイヤキ・白磁・青磁・貝札・貝匙・貝匙未製品・ヤコウガイ有孔製品・鉄製品・割り取りされたヤコウガイ・接合するヤコウガイ破片・石器)など」、「良好な遺構(堀立柱建物跡・貝匙制作跡・ヤコウガイ大量集積・ヤコウガイ貝殻破片集積)が検出された」、「一次調査と二次調査で時間差がある」、「二次調査の一部で包含層の疊重が確認された」、「文化層が三層(①白磁・類須恵器・滑石製石鍋等出土層、②兼久式土器出土層、③弥生土器出土層)確認されている」(高梨 1999b)。

小湊フワガネク遺跡群における成果を整理してみると、兼久式土器を出土する遺跡の認識を塗り替える画期的な成果をあげた遺跡であることが確認できる。土盛・マツノト遺跡、用・ミサキ遺跡などと共に重要な遺跡である。

土盛・マツノト遺跡、用・ミサキ遺跡、小湊フワガネク遺跡群の発掘調査や報告書において、多くの成果があり、これまでの「單一層の小規模遺跡を形成し、定住しなかった」と考えられていた兼久式土器出土遺跡が、大規模遺跡の確認やヤコウガイの大量集積などから、交易や階層社会の出現の可能性などが推測されるようになった。

兼久式土器研究も資料数の増大により飛躍的に進み、中山清美氏、高梨修氏を中心に多くの研究者が、分類・編年研究を行っている。各研究者により分類や年代は相違するが、多くの研究者が文様を中心として分類を実施しており、文様の簡素化という認識は共通している。また、「弥生時代の沈線文土器」が「兼久式土器の沈線文のみの土器」へ移行するというこれまでの見解に対し、兼久式土器に先行する土器群「スセン當式土器」の存在が指摘されるようになり、従来の「弥生時代後期から平安時代」という時代認識に対し、「6世紀から10世紀」という新しい時代に使用された土器であることが指摘された。なお、沖縄・貝塚時代後期の尖底土器からいわゆるくびれ平底へ変化する時期についても兼久式土器の研究が手がかりになる可能性も指摘されている。

2005年、笠利町教育委員会が安良川遺跡の発掘調査を実施している。兼久式土器を中心に、オオツタノハ貝製品、無文貝符、貝小玉、円盤状有孔貝製品、釣り針、磨り石、たたき石、クガニ石などが出土している(中山 2005)。

2008年、名島弥生氏・安斎英介氏・宮城弘樹氏が、南西諸島で実施された放射性炭素年代

		縄文時代晩期										
前6												
前5												
前4												
前3												
弥生時代	前期		1	2								
前1	中期	3	4									弥生模倣土器の段階
1		5	6	7								
2	後期	8	9	10	11							
3												
4	前期	12	13	14								台付彫形土器の段階
5		15	16	17	18							
6	後期	19	20	21	22	23	24	25	26			
7												
8	奈良時代	27	28	29	30							
9	前期	31	32	33								奈久式土器の段階
10												
11	後期	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	類須恵器の段階
12												
13												
		鎌倉時代										

第29図 奄美諸島における在地土器変遷図（高梨 2004）

- 1,2 : 手広遺跡第5層 3~6 : サウチ遺跡 7 : 長浜金久第Ⅲ遺跡 8~11 : 長浜金久第Ⅳ遺跡  
 12~14 : 長浜金久第Ⅲ遺跡第1地点 15,16 : 小湊フワガネク遺跡群 17,18 : スセン當貝塚 19,20 : 長浜金久遺跡  
 21~25 : 川見崎遺跡 26~33 : 長浜金久遺跡 34~46 : 小湊フワガネク遺跡群

測定による年代資料の集成を行っている。縄文時代からグスク時代並行期の資料が対象で、数量は奄美群島 68 点、沖縄諸島 266 点、先島諸島 75 点である。兼久式土器出土層は、古墳～奈良・平安並行期で取り上げられ、新古の 2 グループ（古段階、4～8 世紀頃。新段階、8～11 世紀頃）に別けられている。兼久式土器の研究状況（6 世紀後半～11 世紀前半）の年代観よりやや古い年代を含むが、概ね合致しているとされ、沖縄のアカジャンガー式（4～8 世紀頃）・フェンサ下層式（8～11 世紀頃）の年代とも一致することから、当該時期の奄美群島と沖縄諸島において対比できる可能性を指摘している（名島・安斎・宮城 2008）。

2010 年、伊仙町教育委員会が川嶺辻遺跡の発掘調査を実施、報告を行っている。川嶺辻遺跡では、土器集中区及び土器廃棄土坑より木葉痕を有する土器が確認されている。しかし、これらの土器は、刺突文により文様を表現している土器やイボ状の突起が貼付されている土器など、今までの兼久式土器の範疇とは相違する土器群である。また、川嶺辻遺跡では、放射性炭素年代測定により 10 世紀前後のデータが得られている（新里・宮城 2010）。

2010 年、筆者は小湊フワガネク遺跡群を中心にまとめた兼久式土器分類（鼎 2001）を基に、川嶺辻遺跡など最新の兼久式土器研究の成果を取り入れ、兼久式土器の再分類を行った。

兼久式土器の分類は、文様（沈線文・隆帯文・刻目隆帯文）と文様帶（施文位置）を重視した研究が主であることは前述した通りである。特に刻目隆帯文に重点をおいた分析が多く、その変化の方向性は、簡素化という方向性が示されている。そこで、兼久式土器の文様分類を文様帶（施文位置）に重点を置き、7 類に再整理を行った。壺形土器に関しても、同様の分類がある程度使用可能であると考えている（鼎 2010）。

なお、川嶺辻遺跡で出土した細い刺突文で施文を行う土器は、従来の分類では兼久式土器の古段階「沈線文のみの土器」に分類されてしまうが、これは文様の簡素化による隆帯文の消滅（刻目文を残す）という変化の方向性であると推測される。この土器に類似する資料は、徳之島や沖永良部島で確認できるが、沖縄のアカジャンガー式やフェンサ下層式との関連も考えられ、今後の検討課題である。

以上、兼久式土器研究及び報告を羅列してみた。2000 年までの研究状況と比較すると 2005 年以降に重要な研究及び報告がなされていることが確認できる。分類研究も格段に進歩しており、文様分析・分類のみでなく、器形分析・分類、属性分析・分類も検討されている。また、研究者により見解は相違しているとはいえ、兼久式土器の編年研究も次々と行われ、徐々に兼久式土器の実体が明らかになりつつあることが確認できた。

#### 4. アカジャンガー式・フェンサ下層式の定義

前述した通り、兼久式土器と同時期の沖縄諸島の土器は、アカジャンガー式・フェンサ下層式土器が相当すると考えられている。沖縄諸島の土器研究は、高宮廣衛氏を中心に編年研究が進められているが、伊藤慎二氏が高宮氏の編年表に示されている各細別型式についてまとめてるので、引用したい（伊藤 2000）。

（アカジャンガー式）

①標識遺跡 沖縄本島具志川市アカジャンガー貝塚

②概要 くびれた平底をもち、口縁部のみ外反する深鉢形器形である。口縁部に文様を施したものも多い。具志原式の文様と、ほとんど変わることろが無い。壺形土器を伴う。後述するフェンサ下層式とともに、最大の指標がくびれた平底であり、両者を明確に区分することが困難である。そのため、事実上保留されている型式概念である。ただし、くびれた平底を特徴とする土器群を後期後半に位置づけることでは、大方の見解が一致している。奄美諸島の兼久式は、これらの土器群と明確に一線を画して区別することが困難である。(フェンサ下層式)

①標識遺跡 沖縄本島糸満市フェンサ城貝塚

②概要 くびれた平底をもち、口縁部が微弱に外反した深鉢形器形である。無文化の進行が著しいことが特徴的とされる。口縁部付近に瘤状の突起を貼付したものがある。壺形土器を伴う。

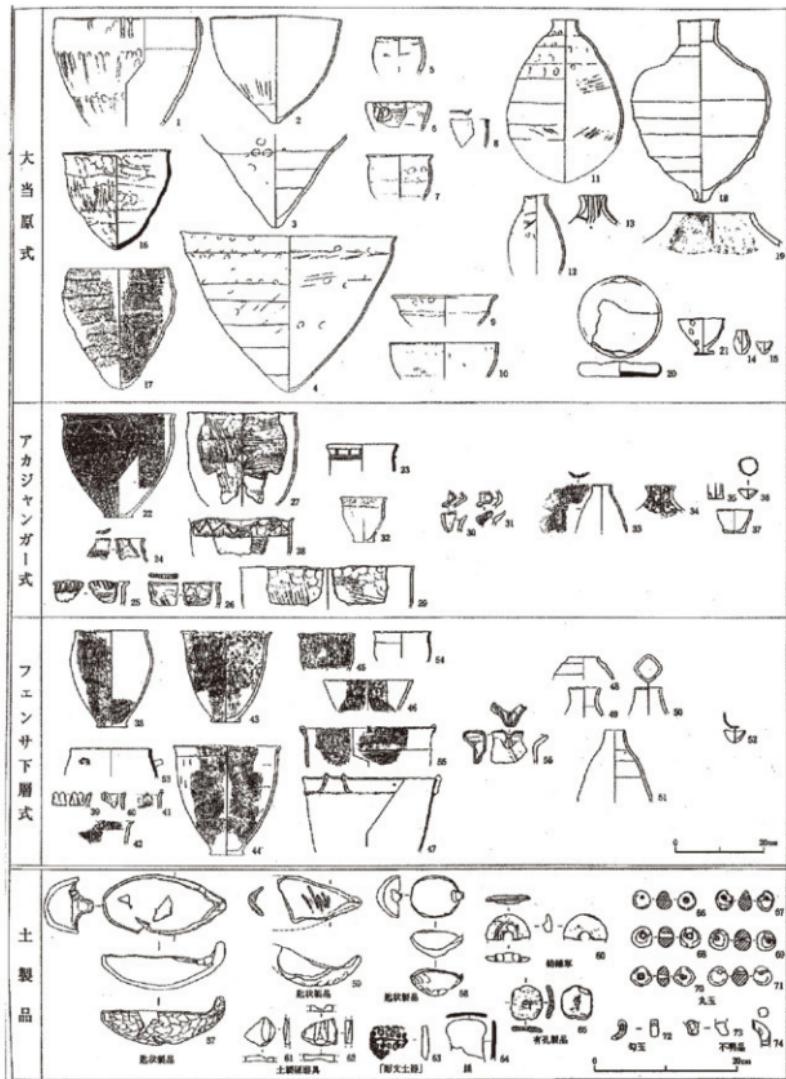
アカジャヤンガー式・フェンサ下層式土器の概要を見てみると、兼久式土器と明確に一線を区別することが困難であることが確認できる。なお、伊藤氏はくびれ平底を特徴とする上器文化を「くびれ平底系上器様式」として総括している(伊藤 2000)。

## 5. アカジャヤンガー式・フェンサ下層式の研究状況

アカジャヤンガー式・フェンサ下層式の研究状況は、川嶺辻遺跡の考察で宮城弘樹氏がまとめているので、概要を引用したい(宮城 2010)。

### (アカジャヤンガー式土器)

- ①尖底土器群：平底土器群の割合が5：5程度出土し、文様施文例は1～2割程度となる遺跡、②平底土器のみの単純遺跡を形成する遺跡、③平底土器群とともに後続すると考えられるグスク上器群との出土例が見られる遺跡がある。
  - 大当原式上器と比較し、胎土は類似するが、器面調整は大当原式が内外面に指頭を残すのに対して、アカジャヤンガー式ではナデ調整が器面を覆いほとんどの内面に刷毛目調整が残る。
  - 文様は、刻目突帯文、沈線による曲線文・直線文、口唇部刻口を施すが、口縁部破片に占める文様施文例の占有率は高くない。また、文様を施す部位は口唇部と口頸部及び胴部であり、兼久式とほぼ同じ。
  - 供伴遺物である開元通宝や貝札(上層タイプ)から、6～7世紀頃の年代観を想定。
  - 沈線や刻突文を多用する古段階→刻目突帯文の区画が特徴となる段階の2段階の区分が想定される。
  - 器形は、総じて胴上半に張りがあって、頸部で外側に強く外反させる傾向が見られ、次第に胴の張り、口縁部の外反の度合いが減る。
  - 底部は、アカジャヤンガー式土器の古段階には、尖底が伴うことが見られるが、基本的にはくびれ平底土器で構成される(例外として、喜如嘉貝塚、米須貝塚、真栄里貝塚などで伴うミニチュア土器は尖底器形)。
  - 底径は、比較的広い。
- (フェンサ下層式土器)
- 文様はほとんど無いが、施文例として①突帯文、②ツノ状突起、③肥厚目縁、④瘤状突起の4種に加え僅かに⑤沈線文を施すものがある。
  - 突帯文を多出する遺跡と、肥厚口縁とツノ状突起を伴う遺跡がある。なお、肥厚口縁とツノ状突起は属性共伴例があるため共時性が認められる。



第30図 沖縄諸島土器編年

貝塚後期前葉(末)～後葉(弥生後期後半～平安併行)・土製品(新里 2004)

後続型式であるグスク土器との併存関係より、暫定的に突堤のみのグループを古段階、肥厚口縁及びツノ状突起が伴うグループを新段階として仮定。なお、瘤状突起を付する資料は、アカジャンガー式・フェンサ下層式の両土器が主体となる遺跡のいずれからも出土。東原遺跡を一つの定点として暫定的にフェンサ下層式に特徴的な文様要素とする。

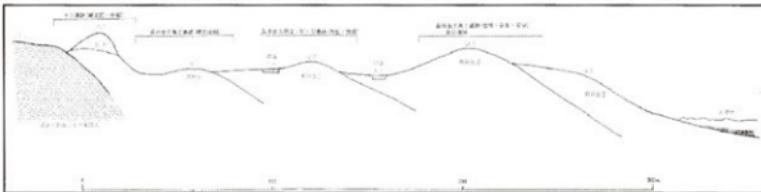
- 器形は、胴上半に張りがあり、頸部で外側に強く外反させる傾向が見られるアカジャンガ一式に対し、フェンサ下層式段階では、次第に胴の張り、口縁部の外反の度合いが減じ、微弱な外反を呈するようになる（ただし、フェンサ下層式では複数の器形が存在）。
- 底径は、フェンサ下層式では、広い平底底部とともに、アカジャンガー式と比較すると小型化、厚底化の現象が見られる。この厚底化の現象は、定形化したくびれ平底土器が底径を減じ乳房状尖底的な形態へ型式変化するためである。また、壺の底部は不明としながらも、兼久式の壺が単純なくびれ平底形態を示さないことから、底部形態の差と器種差の相関を考慮することが今後の課題である。

以上、宮城氏の報告をまとめてみたが、アカジャンガー式・フェンサ下層式土器の研究も未だ不明な点が多い事が理解できる。しかし、兼久式土器との類似点が多く、兼久式土器の実態を明らかにするためにも、相互に比較検討を行うことが必要である。そのことにより、アカジャンガー式・フェンサ下層式土器の実体もより明らかになると考えられる。

## 6. 遺跡の立地について

前述したが、兼久式土器の出土地は、砂丘地がほとんどである。中世以前は、農耕よりも海洋資源への依存が強いと考えられるため、海に近い砂丘地が生活地として適していたこと、島の環境から生活域が限られていたことが理由であると考えられる。兼久式土器を出土する多くの遺跡が、層位的堆積に恵まれず單一文化層を形成するのも、基本的に、兼久式土器を用いていた時期は小規模な遺跡を形成し、定住しなかった（中山 1984）と考えられるためである。また砂丘の形成は、垂直方向ではなく、海のほうに向かって形成されると考えられ、このことも層位的堆積に恵まれない理由の一つである。

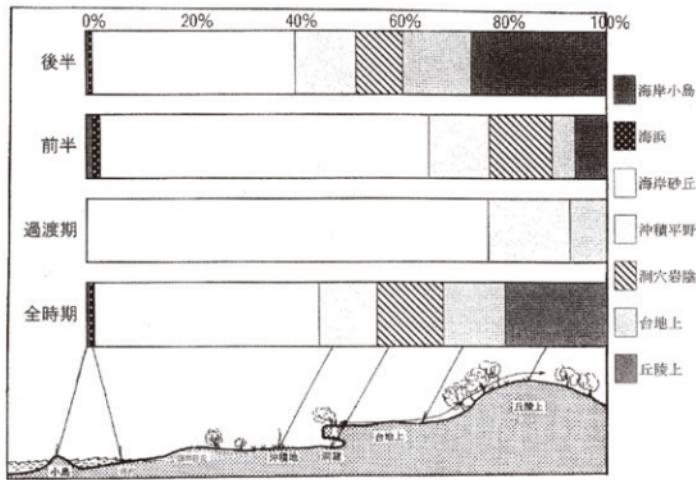
奄美群島の遺跡の立地については、弥栄久志氏が長浜金久・ケジ・泉川遺跡で（第31図）砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図を示し、砂丘の形成によって生活域が海側へ移動していくことを説明した（弥栄 1987）。なお、1990年に鹿児島県教育委員会が調査した『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II』でも遺跡の立地条件の類型化を試みており（長野・富田 1990）、2005年の瀬戸内町教育委員会の報告でも遺跡の立地（生活域）が、古砂丘（繩文）から新砂丘（弥生以降）へと移動することを報告している（鼎 2005）。



第31図 砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図（弥栄 1987）

沖縄編年貝塚後期上器の遺跡立地は、2000年6月に宮城氏（宮城 2000）が、2000年10月に岸本氏他がまとめている（岸本 2000）。宮城氏論文の遺跡立地をまとめてみる。

- 沖縄後期の遺跡は、大半は海岸砂丘地に選地している。前半期には、海岸砂丘地（約63%）



第32図 沖縄後期の遺跡立地（宮城2000）

丘陵上・台地上（10%未満）の立地。後半期では丘陵上への遷地が約25%を占めるとともに、台地上・洞穴・沖積地への立地も10%前後となる（第32図）。ただし、低島と高島などの相違があり、情報を一括して単純に述べるのには危険性がある。

- 沖縄本島内の遺跡集中地として、本島北端国頭村辺戸岬東海岸、本部半島北海岸、金武湾南の沿岸部、読谷村～北谷町の周辺、糸満市の西海岸、本島南端の東海岸の6つの地域で顕著である。
- 河川沿いに密に分布する例があり、上流域の内陸部にまで遺跡が分布している。
- 砂丘列の尾根に並行する形で貝塚及び貝塚群を形成し、層位的堆積に恵まれず单一文化層を形成する例が多い。このような発掘調査の現状は奄美地域の新砂丘遺跡においても同様である。
- 砂丘遺跡が多いのは、主な生活域が砂丘地に限られた亜熱帯地域、島嶼部の一つの特徴として捕らえることができる。
- 丘陵上及びその崖下に形成される遺跡が各地域に点在する。著名な遺跡を列記すると、勝連城南貝塚、フェンサ城貝塚などがある。後続するグスク時代遺跡とオーバーラップして遷地することから、これらの土器群がグスク時代直前の土器型式として認知されている。
- 砂丘遺跡→洞穴遺跡→丘陵上遺跡への立地から見た後期遺跡の展開。
- 後半期における遺跡の内陸部展開については、グスク時代直前の時代として捉えるなら当然の状況であろう。特に後半期において傾向が顕著になるのは前述したとおりである。挙司出現の契機は8~12世紀と仮説され、この頃の農耕の可能性もある。
- 近年、那崎原遺跡では鍔跡+溝跡遺構と米・大麦・小麦・豆・タデ料などの種子遺体がセットで出土している、あわせてナガラ原東貝塚の調査で炭化米が検出されている。

宮城氏は、各研究者や報告書をまとめ、沖縄貝塚時代後期遺跡の大半が、砂丘地に立地するとしている。しかし、後期後半期になると内陸部への展開も見られるとしている。この内陸部への移動は、後続するグスク時代遺跡とオーバーラップして遷地しており、那崎原遺跡

やナガラ原東貝塚発掘調査成果より、農耕の可能性も示唆している。

遺跡の立地について、奄美群島と沖縄諸島はほぼ一致している。ただし、奄美群島の遺跡立地が山手側から海側へ移動していくのに対し、沖縄諸島では、沖縄貝塚時代後期後半期に内陸部へ移動し、グスク時代への移行や農耕の可能性も指摘されている点が注目される。低島と高島などの相違やグスク時代への移行の問題、農耕の開始の問題など、今後奄美群島でも検討が必要である。

## 7. 揭殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付け

以上、兼久式土器とアカジャヤンガー式・フェンサ下層式土器の研究状況を先行研究の成果より概観してみた。

掲殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付けであるが、底部に本葉圧痕を残すことを考慮すると、兼久式土器に近似する資料であると考えられる。しかし、兼久式土器に特徴的な刻目突帯文を施す資料は少ない。このことは伊仙町川嶺辻遺跡出土土器（10世紀前後）と類似する。

川嶺辻遺跡の報告を参考にすると、宮城氏がくびれ平底系上器を下記の3段階に分けている（宮城 2010）。

- くびれ平底系上器の初期型式：くびれ平底土器群は第1段階として、沈線文で文様を構成する中山氏のマツノト式、高梨氏の兼久式I期の初期兼久式からと、大当原式の文様の影響下にあるアカジャヤンガー式古段階。
- くびれ平底系の典型的な型式：第2段階は、新相のアカジャヤンガ一式が刻目突帯文を特徴とするいわゆる典型的な兼久式が並行すると目される段階。
- くびれ平底系の終焉段階の型式：第3段階として刻目突帯文が消失し、突帯文や浅い刺突文や沈線で区画文のみの文様構成となる川嶺辻に代表される土器群と沖縄の既知のフェンサ下層式の概略の段階。

宮城氏は、川嶺辻遺跡出土土器が、著しい無文化傾向が認められ、沖縄の既知の型式としてはフェンサ下層六段階（高梨氏編年の最新段階の資料）に並行すると目されるとし、前述の第3段階に位置付けられるとしている。

掲殿遺跡出土のくびれ平底土器は、小破片で器形復元可能な資料が少ない。復元可能な資料もこれまでに出土した兼久式土器と比較すると、小型の資料が多いように思われる。文様構成は、横位の連続した刺突文（区画文）に2条の縦位刺突文を施す土器が大半を占めている。この文様構成は、川嶺辻遺跡の文様構成と類似するが、施用方法において相違する。くびれ平底土器の変化の方向性が無文化方向である事を考慮すると、掲殿遺跡→川嶺辻遺跡という流れが考えられ、掲殿遺跡出土のくびれ平底土器は、川嶺辻遺跡より古段階であると推定される。なお、掲殿遺跡出土のくびれ平底土器は隆帯が無いことから、沈線文のみの上器群として捉えることも可能である。前述の第1段階に該当する可能性も考えられるが、掲殿遺跡の立地が砂丘地でなく内陸部赤土台地上であることを考慮すると、沖縄貝塚時代後期後半の遺跡立地と同様の立地であることが理解できる。また、共伴する刻目突帯文を有する土器に沈線が施されていないものが大半であることも考慮すると、掲殿遺跡出土のくびれ平底土器は、前述の第2段階から第3段階の頃に位置付けられ、高梨氏の土器変遷（第29図）の9世紀前後に当たる可能性が高い。

器種構成は、甕形土器と壺形土器が存在する。なお、瘤状突起を持つ土器は、復元図を確認すると壺形土器のようである。瘤状突起は、土器の周囲を完全に巡らせない（途切れる）隆帯文からの変化ではないかと考えられる。

底部であるが、くびれを持つ平底であり、小型で厚めの底部も存在する。底部の木葉痕は、くびれ平底土器のすべての資料で確認できるのではなく、無文の底部も存在する。縄文後期土器も出土していることから、無文の底部は縄文後期土器の可能性も少なくないが、掲殿遺跡のくびれ平底土器は、木葉痕を有する土器と有しない土器が存在すると考えられる。なお、木葉痕を有している資料についても木葉痕の判別が困難なものが多い。木葉痕を有する土器、有しない土器の両方を出土する遺跡の性格については、今後も検討が必要である。

遺跡の立地であるが、砂丘地では無く内陸部赤土台地上である。この遺跡立地は、これまでの兼久式土器の遺跡立地（第31図）と相違する。しかし、前述した通り沖縄諸島の事例とは類似し、川嶺辻遺跡も同様の立地である。奄美群島との相違、沖縄諸島との類似は、島の環境や位置関係を考慮しなければならないが興味深い。また、沖縄諸島の研究状況では、グスク時代遺跡への展開や農耕の可能性なども指摘されていることから、揚殿遺跡の遺跡立地は奄美群島のグスク時代遺跡への展開や農耕の可能性を考える上で重要である。

出土状況であるが、発掘調査において遺構は確認されていないが、周辺に住居跡が存在する可能性はある。また、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器は絶じて小破片であり、土器の文様構成にバリエーションが少ないと考えると短期間の使用・廃棄である可能性が高い。なお、自然遺物で貝類が出土しているが、兼久式土器に特有のヤコウガイの出土量が少ない。このことは、生活環境が変化した可能性も考えられる。

以上、揚殿遺跡で確認されたくびれ平底土器の位置付けについて検討してみたが、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器と、今までに確認されている兼久式土器において相違する点が複数存在することが確認できた。これまでの兼久式土器研究は、奄美群島北部の遺跡を中心に行われてきた。それは、発掘調査が奄美群島北部に集中していたためである。大凡の兼久式土器編年は、中山氏や高梨氏によりまとめられているが、揚殿遺跡及び川嶺辻遺跡出土の土器群は含まれていない。それは、これまでの発掘調査において、これらの土器群が殆ど確認されなかつたためであると考えられる。また、遺跡の立地も奄美群島北部と奄美群島南部では相違することから、兼久式土器後半（フェンサ下層式土器並行期）では、奄美群島北部と奄美群島南部の土器を取り巻く環境が相違している可能性も考えられる。これは、奄美群島北部に土師器が集中することとも無関係では無い可能性もあり、今後の検討課題である。

今回、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器を実見・位置付けの検討を行う貴重な機会をいただいた。揚殿遺跡出土の発掘調査資料は、小破片であり遺構も確認されて無いが、今後の兼久式土器、アカジヤンガー式土器、フェンサ下層式土器研究に大きく寄与する資料であると考えられる。

※参考文献については紙幅の都合上、掲載を割愛した。

## 第2節 調査のまとめ

掲載遺跡は、鹿児島県大島郡知名町大字屋子母に所在する縄文時代後期～晚期・古代・中世に併行する時期の遺跡である。遺跡は、海岸から約500m内陸部に入った海岸段丘手前の緩い傾斜面に位置する。標高は約14m～19mである。中山間地域総合整備事業に伴って発掘調査を実施し、I～VII層の堆積が確認された。各層の遺物出土状況から第1文化層（II層～III層）と第2文化層（IV層～VII層）の2文化層に大別して報告を行った。

### 1. 土器・滑石混入土器・カムィヤキ・陶器（第10表）

本遺跡出土の土器等は時期別に以下のように大別できる。

縄文時代後・晚期併行期…壺I～V・VII類、壺I～VI類、鉢I～III類、壺VII類・甕IX・X類の一部  
古代併行期…壺VI類・壺VII類の一部、壺VII～VIII類、甕IX・X類の一部

中世併行期…滑石混入土器・カムィヤキ

近世…陶器

土器は、壺形土器8類、甕（深鉢）形上器10類、鉢形土器3類、底部4類に分類した。

甕I類は、嘉徳II式土器に該当する。甕II類は、犬田布貝塚II類土器（吉永・宮田1984）の一部に該当する。鉢I類は、甕II類に近い時期が考えられる。壺I類は、再念I式土器に該当する。壺II類は、犬田布式土器または宇宿上層式の一部に該当する。壺III類・甕III類・鉢II類は、宇宿上層式土器に該当する。壺IV類・甕IV・鉢III類は宇宿上層式土器より肥厚部の厚みを減じたもの、肥厚部の頂点が下位に位置するもの、肥厚部中央をややくぼめ胴部との段差部分のみ強調したものなどを一括したもので、宇宿上層式土器～仲原式土器への移行期に位置づけられると考えられる。肥厚部が台形状をなし、口唇部を比較的平坦に形成する特徴を有する甕V類についても、友留遺跡での出土例などから宇宿上層式土器～仲原式土器の間に位置づけられると考えている。壺V類は、与論島上城遺跡の出土状況（吉永・堂込1990）などから仲原式土器に伴うものと考えられる。甕VI類は、仲原式土器の範疇に含まれると考えられる。甕VII類は、刻目縦帶を有する土器で兼久式土器の範疇に含まれると考えられる。甕VI類・甕VII類は、縱位・横位の連続した刺突により文様帯が構成されるもので、兼久式土器後半期に併行するものと考えられる（鼎 本報告書）。伊仙町川瀬辻遺跡（新里ほか2010）・和泊町阿茂留B遺跡（整理中）に類例が見られる。壺VII類・甕IX類は、仲原式土器もしくは兼久式土器等の口縁部片のいずれかに該当する。小片のため肥厚・施文の有無や器形の判断が困難なものが多い。甕VIII類・甕X類は前述の分類に当てはまらないものを一括しており、縄文時代後・晚期併行期～兼久式土器期の上器を含む。底部は、底I類・底II類の平底・尖底については、これまでの各遺跡での出土例や胎土等から縄文時代後・晚期併行期に属する可能性が高いと考えられる。底III類のくびれ平底については、古代併行期土器群の特徴であることが広く知られている。底IV類については、いずれの時期に帰属するものか不明であるが、球形の胴部を有する壺形土器が想定される。滑石混入土器・陶器は、小片のため部位の特定が困難であったことや出土量が少なかったため個別に述べた。カムィヤキについては、新里の分類（新里2005）を参考とした。

## 第1文化層

第1文化層からは、縄文時代後・晚期併行期(32.5%)・古代併行期(23.6%)・中世併行期(34.1%)・近世(6.5%)・時期不明(3.3%)の土器等が出土している。滑石混入土器が8点、カムイヤキ34点と中世併行期土器等の全体出土量の89%が本文化層から得られている。滑石混入土器は、小片が多く部位が確認できたものは僅か1点に留まった。小片のため図化できなかったが、滑石製石鍋の破片と思われる資料も2点出土している。カムイヤキは、新里分類の壺A12類・壺A13類に該当すると考えられるものが出土している。叩き痕など製作上の特徴から全体的にみてもA群に該当すると考えられるものが大半を占めている。このことから、新里の編年(新里2010)の第1段階、第2段階に該当する時期(11世紀後半～13世紀前半)が考えられる。これまで、奄美・沖縄の島々で共伴関係が確認されている一連の遺物が本遺跡でも確認されたことは、貴重な成果だと考えられる。造構は、III層でピットが多数確認された。そのうち掘立柱建物跡として1棟を掲載した。規模は、1間×1間(1.6m×1.9m)で性格等は判然としない。今後、本地域での掘立柱建物跡の類例を待って再検討を要する。III層については、しまりが悪く、基盤層の赤褐色土のようなブロックを含むことから、第1文化層期に整地など人為的な土の移動が行われた可能性がある。

## 第2文化層

第2文化層からは、縄文時代後・晚期併行期(41.2%)・古代併行期(38.9%)・中世併行期(1.3%)・近世(0.3%)・時期不明(18.4%)の土器等が出土している。縄文時代後・晚期併行期の土器は、第1文化層で40点、第2文化層で161点出土しており、80%が第2文化層から出土している。古代併行期の土器は、第1文化層で29点、第2文化層で152点出土しており、84%が第2文化層から出土している。このことから本文化層は、縄文時代後・晚期併行期及び古代併行期を主体とすると考えられる。第2文化層は、2時期の土器群を含むことから上層部と下層部で二分される可能性を検討したが、各層において縄文時代後・晚期土器群または、古代併行期土器群のいずれかが卓越する状況はみられないことから第2文化層として一括するに至った。これは、溝状の窪地への遺物廃棄や流れ込みなど多様な要素が絡み合いながら層が堆積した結果と考えておきたい。

縄文時代後・晚期併行期の土器群については、壺III・IV類、甕III・IV類が比較的多く出土していることから、宇宿上層式から仲原式土器初期にあたる縄文時代晚期～弥生時代初頭が主体となり、住吉貝塚とほぼ同時期と考えられる。甕II類は、徳之島犬田布貝塚で比較的まとまった出土が見られII類土器として分類されている(吉永・宮田1984)。伊藤慎二は、北琉球の各土器型式を7様式に再整理し、犬田布貝塚I b類・II類を面縄西洞式や犬田布式の一部類・室川式とともに肥厚口縁系の古2段階に位置づけた。さらに、徳之島・沖永良部島では、面縄西洞式が希薄で当該土器が広くみられるとしている(伊藤2006)。沖永良部島においては、浜須B遺跡や住吉貝塚の住居跡埋土や土坑、混貝層から少量ながら出土例がみられ、いずれも伊藤が肥厚口縁系古2段階前後に位置づける土器と共に伴している。また、和泊町西原海岸遺跡(整理中)でも比較的まとまった出土がみられる事から、型式学的・編年的位置づけの検討が進むことが期待されるものである。

古代併行期の土器群については、壺VI類及び壺VII類の一部、甕VII類・甕VIII類及び甕IX類の一部が

該当し、遺跡全体では壺VII類が15点、甕VII類が78点出土している。有文の壺・甕形土器、無文の壺・甕形土器により構成されると考えられる。甕VII類は、横位の刻目隆帯を有するもので、隆帯上位に沈線等を施す例はみられない。刻目の間隔は短く、深さは土器本体まで至る。貼付した隆帯を分断するように見えるものがほとんどである。甕VII類は、縦位・横位の連続した刺突により文様帯を構成するもので、141は口縁部がやや外反する器形と文様構成をうかがうことができる資料である。横位に廻る刺突の上位に沈線や鋸歯状の浅い凹線が施されるものも極少量得られている。刺突は、3mm～9mm幅で半截竹管状工具やヘラ状工具を利用したと考えられる。工具を立てて垂直に浅く押し当てたもの、半截竹管状工具の外面を押し当てたもの、内面を押し当てたもの、深く短いものの、浅く長いものと多様性に富んでいる。壺VI類は、文様構成から甕VII類に伴うものと考えられる。55は、壺VII類に分類されたもので、胴上部に突起が貼付される。川瀬辻遺跡においても同様の例がみられ、当該期に含まれる可能性が高い。壺形土器と甕形土器の割合については、壺VII類に型式判断が困難なものが含まれることや小片が多く器種の判別が困難であるという前提はあるが、壺型土器が概ね1割程度と考えられる。奄美大島においては、壺形土器に明らかに泥質の胎が多い状況（中山ほか2006）がみられるが、本遺跡では資料数の制約があるものの壺形土器で約40%、甕形土器で約5%と壺形土器に比較的多い傾向を示している。この点については、今後、資料の増加を待って再検討を要する。底III類のくびれ平底は、87点の出土があり、本文化層出土底部の76%を占める。底面の葉痕の有無については、葉痕あり46%、葉痕無し18%、不明36%であった。ただし、底部の残存部が概ね4分の1以上あり、葉痕が認められないものを葉痕無し、残存部が4分の1以下で葉痕が認められないものを不明として取り扱った。この結果から、本遺跡出土のくびれ平底土器には、葉痕の無いものが一定量含まれることが明らかとなった。

これらの古代併行期上器群については、奄美大島・徳之島・沖縄での出土状況や遺跡の立地、先行研究との比較検討から9世紀前後に位置づけられる可能性が示された。また、土器の文様構成のバリエーションの少なさから短期間の使用・廃棄の可能性が高いことも指摘された（鼎 本報告書）。奄美大島と沖縄本島の中間に位置する地理的状況から、各時代とも両方の土器文化の影響が認められる本島の性格を踏まえつつ、兼久式土器、アカジャンガ式土器・フェンサ下肩式土器との比較を行いながら当該土器群の検討を行っていくことが今後の課題である。

## 2. 石器（第11表）

石器は、第1文化層から58点（27.4%）、第2文化層から144点（68.2%）、サブトレンチから9点（0.4%）、計211点が出土した。器種別の割合では磨石・敲石類が56%、圓石・台石・石皿類が22%を占める。貝類・堅果類の打削やすりつぶしに関連する遺物が圧倒的に多く、狩獵採集の様相を反映しているものと考えられる。石斧は、第1文化層出土で4点、第2文化層で7点と少数であった。砥石として取り扱った31は、和泊町友竿遺跡においても類似資料が発見されていることから、中世併行期の貴重な追加資料と考えられる。

## 3. 鉄製品

鉄製品は、IV層から1点、IV'層から2点出土している。217は、扁平な形状であり、柄に装着

し刃物としての機能が推測された。他の2点については、断面が長方形状で先端にかけて細くなる形状であるが用途は不明である。時期については、いずれも第2文化層からの出土であり古代併行期に属するものと考えられる。奄美市フワガネク遺跡（高梨 2005）・マツノト遺跡、宇検村屋鈍遺跡（西園 2008）において鉄製品の出土例がみられる。このほかに、第1文化層において鉄滓が2点確認されている。知名町前当遺跡（戸崎・東 1988）でも鍛冶場跡が確認されており、中世併行期の鍛冶に関連する活動の広がりをうかがわせるものである。

#### 4. 自然遺物

自然遺物は、第2文化層から脊椎動物骨遺体、貝類遺体が多数出土しており、表8・表9に示した。これらの遺物が縄文時代後・晚期、古代併行期のいずれに属するものか特定は困難であった。同定作業が十分でないため具体的データでの比較は行えないが出土遺物の観察所見を述べる。

狩猟採集により、陸ではイノシシ・木の実等、海では、魚類・貝類・ウミガメ等を獲得しており、大きくは住吉貝塚や友留遺跡などと類似した内容と考えられる。貝類は、コオニコブシ・オキニシ・イモガイ科・タカラガイ科が多く得られている。チョウセンサザエ・ヤコウガイは少数である。この点においては若干の相違がみられる。また、奄美大島では兼久式土器期の遺跡で大量のヤコウガイが出土（中山 2006・高梨ほか 2007）する特徴がみられるが、本遺跡の状況は遺跡の立地によるものなのか、他の要因によるものなのか、今後の検討課題である。

#### 5. 遺跡の形成過程

発掘調査から推定できる本遺跡の形成過程について以下に記す。

第2文化層期：縄文時代後・晚期頃、古代併行期の2時期に本遺跡周辺に集落が営まれ、窪地を廃棄場所として利用する。以後、流れ込み等による遺物の二次堆積を伴いながら埋没する。

第1文化層期：中世併行期に整地等を経て、人々の活動場所としてピット・掘立柱建物等の遺構が形成される。その後、近世～現代に至るまで耕作地として利用される。

最後に、本遺跡に該当する時期の沖永良部島の様相について記し、まとめとしたい。

縄文時代後・晚期は、海岸砂丘に神野貝塚・西原海岸遺跡、海岸付近に浜須B遺跡・住吉貝塚・友留遺跡、内陸部台地上に石原遺跡・阿茂留B遺跡・揚殿遺跡が形成され、狩猟採集の生活が営まれる。住居跡も当該時期のものが多く、貝類や動物骨を利用した装飾品等を多数伴うほか、黒曜石や土器など他の地域との交流や影響を示す遺物も一定量みられる。古墳時代併行期には、スセン當貝塚・西原海岸遺跡が砂丘地に形成される。古代併行期は、これまでほとんど発掘調査例がなく不明な時代であったが、近年、シャノ平遺跡、阿茂留B遺跡、揚殿遺跡の発掘調査が相次いで行われ、くびれ平底を有する土器の出土が確認されている。いずれの遺跡も海岸からやや内陸部に立地する。中世併行期は、和泊町友竿遺跡でカムイヤキ・青磁・グスク土器・鉄製品など重要な資料が表される。根皿原遺跡（北野 2009）ではこれらの遺物が発掘調査により出土した。グスク跡や有力者の墓といわれる場所、それにまつわる伝説が多く存在する時期であるが発掘調査の事例が少なく、

実態を解明するには至っていない。また、山間部の鍾乳洞内において、カムイヤキやグスク系土器の発見例が報告されており、今後の調査が期待される。

本遺跡は未だ不明な部分の多い古代・中世併行期を含む遺跡であり、出土資料は当該時期の様相を解明する貴重な手がかりになるものと考えられる。力不足から不十分な点が多いが、今回得られた課題を今後の調査に活かしていきたい。

#### 《主要参考文献》

- 吉永正史・宮田栄二 1984『大田貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 伊仙町教育委員会  
 吉永正史・室込秀人 1990『上城跡・上城遺跡』与論町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 与論町教育委員会  
 齋 丈太郎 2011『掘殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付け』本報告書  
 新里亮人ほか 2010『川嶺辻遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 伊仙町教育委員会  
 伊藤慎二 2008『琉球縄文土器(前期)』『絶観 縄文土器』絶観縄文土器刊行委員会  
 中山清美ほか 2006『マツノト遺跡』笠利町文化財報告第28集 笠利町教育委員会  
 高梨 修 2006『奄美大島名瀬市小瀬ワガネク遺跡群Ⅰ』名瀬市文化財叢書7 名瀬市教育委員会  
 西岡勝彦 2008『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書143 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 戸崎勝洋・東 和幸 1988『前当遺跡』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 知名町教育委員会  
 北野堪重郎 2009『根皿原遺跡』和泊町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 和泊町教育委員会  
 新里亮人 2005『カムイヤキ古窯跡群IV』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 伊仙町教育委員会  
 新里亮人 2010『徳之島産カムイヤキの生産と流通』『琉球列島先史・原史時代における環境と文化的変遷に関する実証的研究』第2回琉球班研究会資料  
 高梨 修ほか 2007『奄美大島奄美市小瀬ワガネク遺跡群II』奄美市文化財調査報告書1 奄美市教育委員会

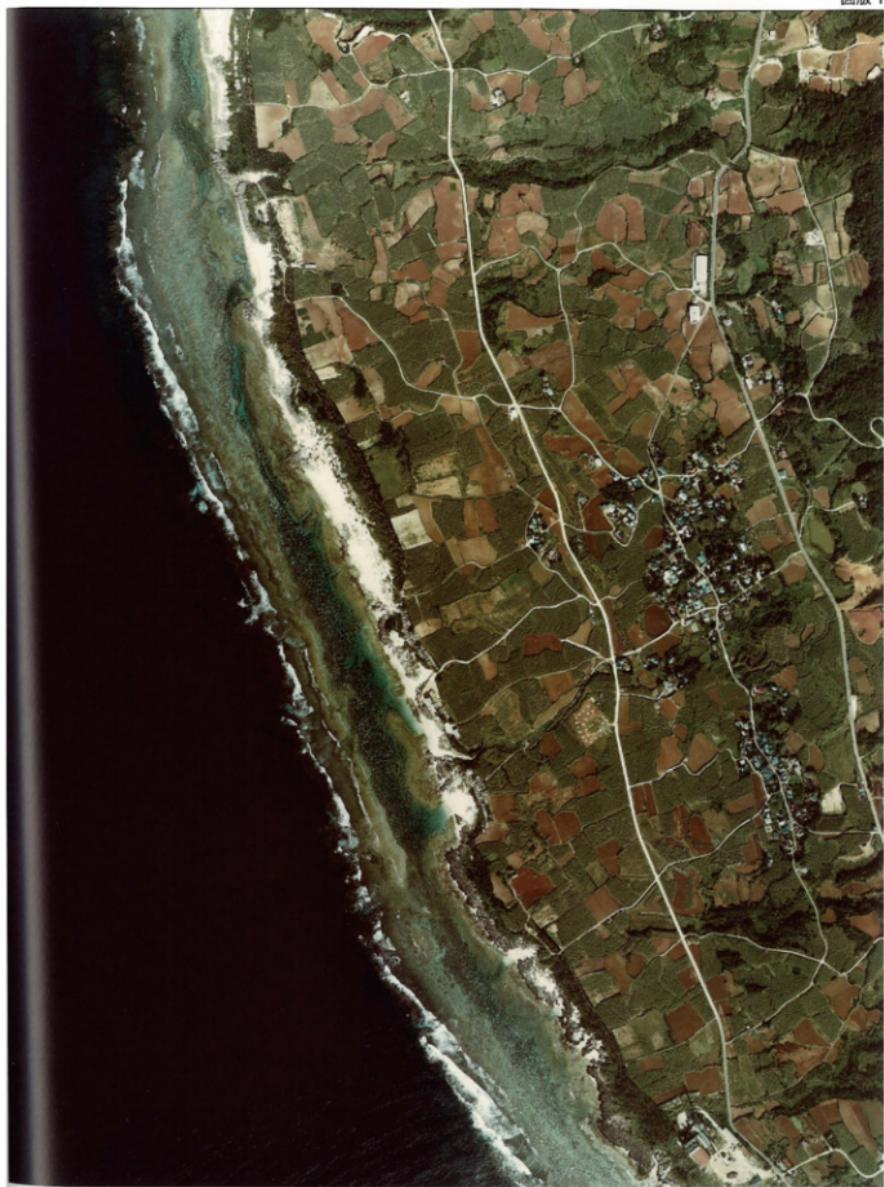
第10表 出土土器等集計表

文化層	分類	壺形土器								甌形土器								鉢形土器								カムイヤキ								計		
		I	II	III	IV	V	VI	VII	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	I	II	III	X	I	II	III	I	II	III	IV	A	B	C	D	E	F	G		
		上																								混入	新石器	小計	陶器	不明	小計	不明				
第1文化層	II上			1																						2	2	2	3	3	3	12				
	II	2	3	4													6	11	3	6	3	1	1	1	3	3	6	4	3	13	5	21	6	27	4	96
	II-Ⅲ上																1	1	2							1	1	2	1	2	2	4	1	12		
第2文化層	III																2									1	1	1		0	0	3				
	IV	1	9	2	1	1	1										3	12	13	2	3	1	12	10	2		1	4	12	11	9	22	4	4	4	104
	IV'		1	1	1	1	1										3	6	1	1	16	9	5	4	1	1	6	2	4	12	1	1	1	33		
第2文化層	V	6	1	1	2	1											1	4	6	2	2	4	15	9	2		1	1	2	3	2	4	9		0	69
	VI-VIII	6	5	4	1	1											4	8	12	4	2	6	14	12	7		3	3	4	4	9	17		0	0	109
サブトレンド	VIII	1	1	1	1	1											1	5	3	1	1	11	9	2		1	2	6	1	1	8	1		0	0	52
	サブトレンド																1	4			2	1	2		2		1	1		1	1	3	4		17	
計		10	125	13	3	41	51	2	9	44	54	9	81	15	78	53	19	41	11	21	10	16	40	16	31	87	11	81	32	11	43	91	531			

第11表 出土土器集計表

層/器種	磨製石斧	打製石斧	局部磨製石斧	磨・敲石	叩石	台石	石皿	砥石	不定形削片	不明	計	
第1文化層	2	2		33	1	7	1	1		2	9	58
第2文化層	2	2	3	81	13	15	8	2		6	12	141
サブトレンド				5		1		1			2	9
計	4	4	3	119	14	23	9	4		8	23	211

# 図 版



揚殿遺跡周辺空中写真（昭和 52 年撮影）

国土画像情報 国土交通省

図版2 遺跡周辺の環境



①屋子母海岸

②屋子母海岸の湧水

③湧水（ウクヌホー）

④浜倉

⑤与論・沖縄を望む

図版3 発掘・整理作業



①表土剥ぎ状況 ③整理作業状況  
②機材使用状況 ④発掘調査状況

図版4 泊り原遺跡・ヤイント遺跡近景



①泊り原遺跡近景  
②ヤイント遺跡近景

図版5 調査区A



①調査区A近景 ②遺構検出状況

③土坑1 ④土坑2

⑤調査区A完掘状況

図版 6 調査区 B



①調査区 B 遺構検出状況

②ピット掘り下げ状況

図版7 調査区C(1)



①



②



③



④



⑤

①調査区C近景 ②第1文化層遺物出土状況

③ピット検出状況(C3) ④ピット検出状況(A3・B3)

⑤ピット検出状況

図版8 調査区C(2)



①第2文化層遺物出土状況 ②土器出土状況

③獸骨出土状況 ④土器出土状況

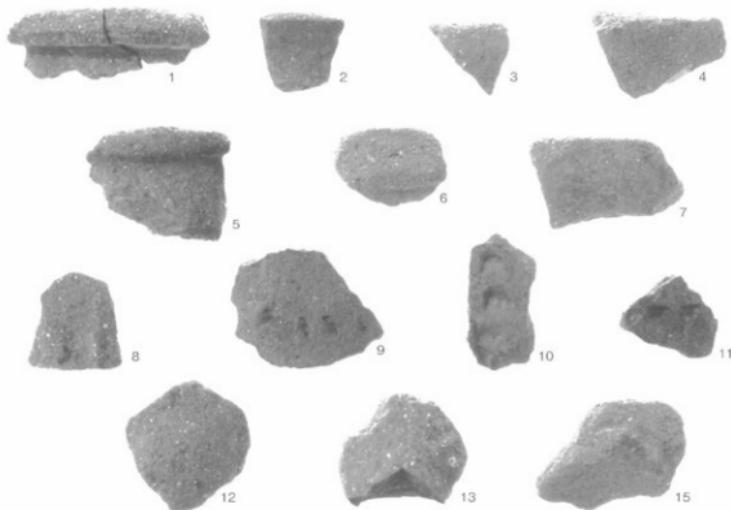
⑤調査区C完掘状況

図版9 調査区C (3)

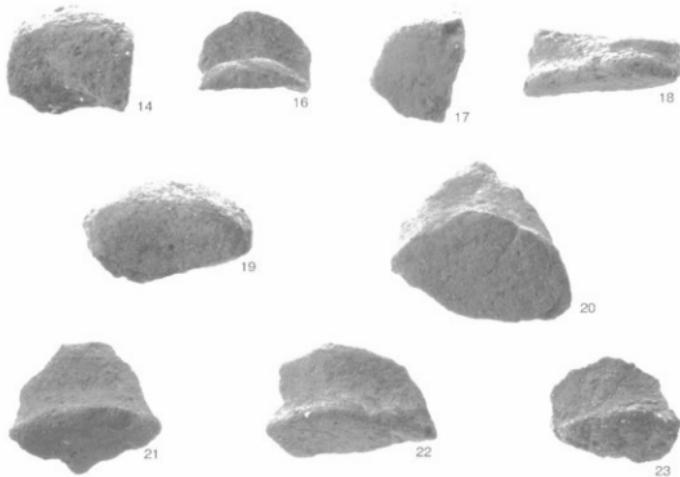


①土層断面 (C3 北)  
②土層断面 (C3 東)  
③発掘作業員

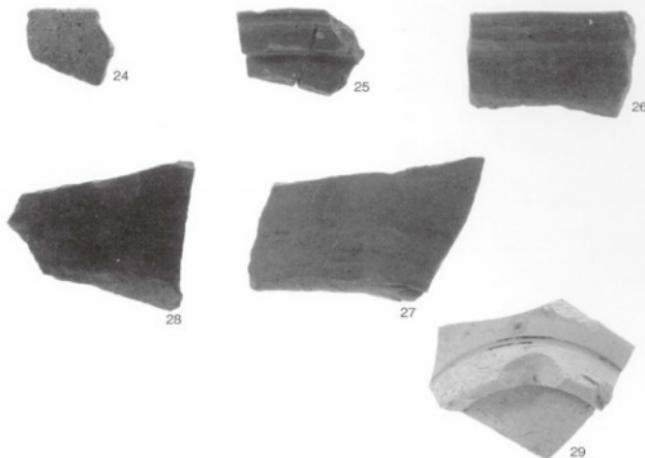
圖版10



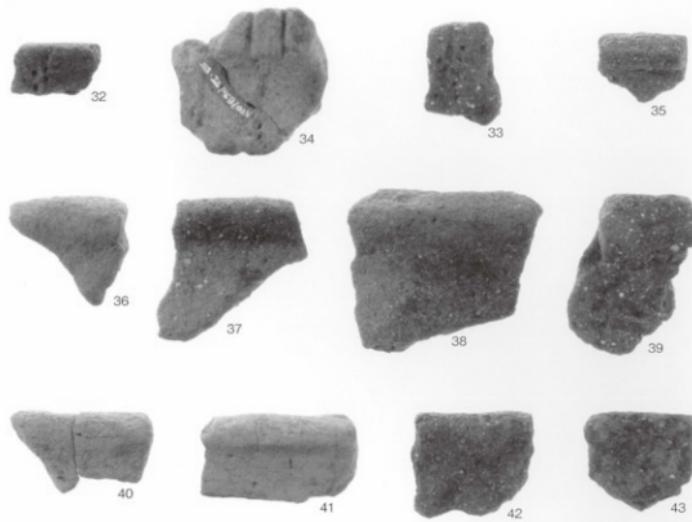
第1文化層出土土器（1）



第1文化層出土土器（2）

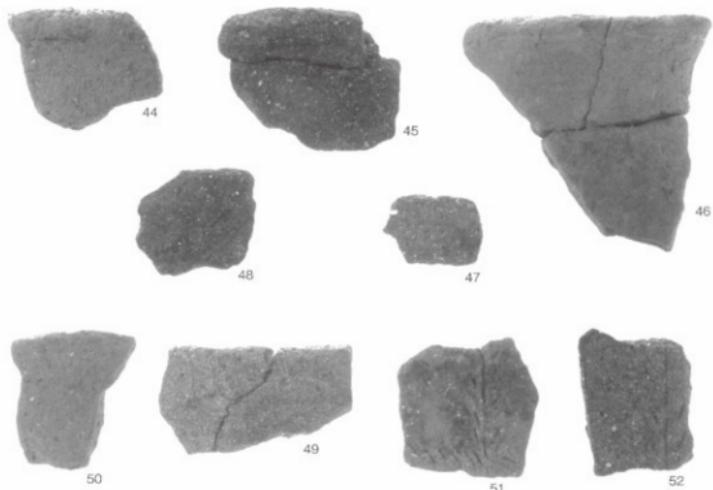


第1文化層出土滑石混入土器・カムイヤキ・陶器

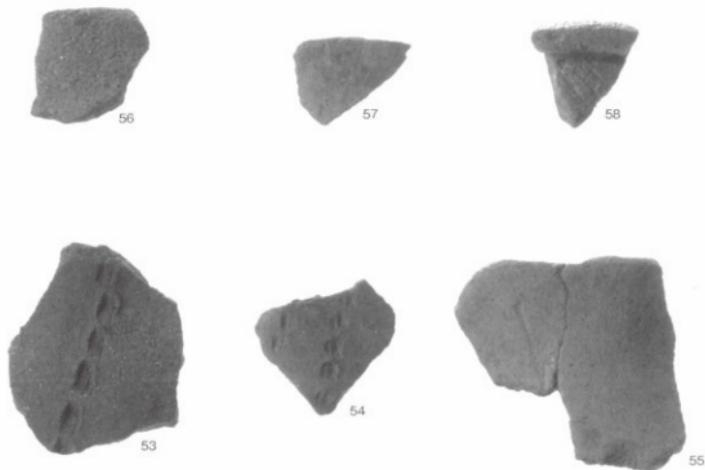


第2文化層出土土器（1）

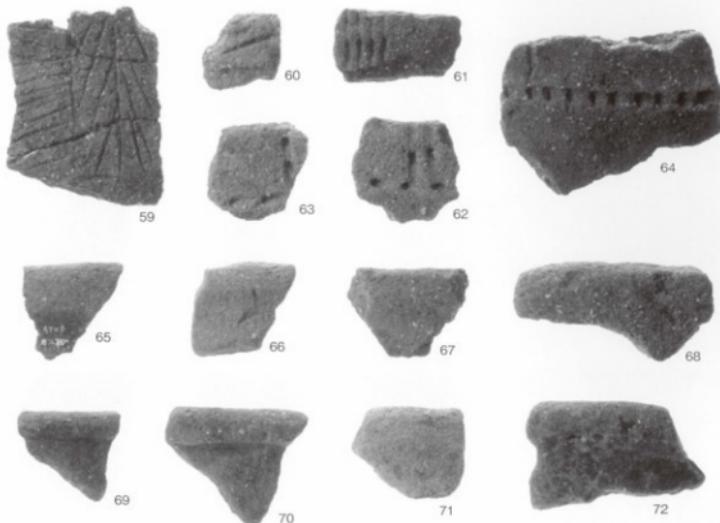
図版12



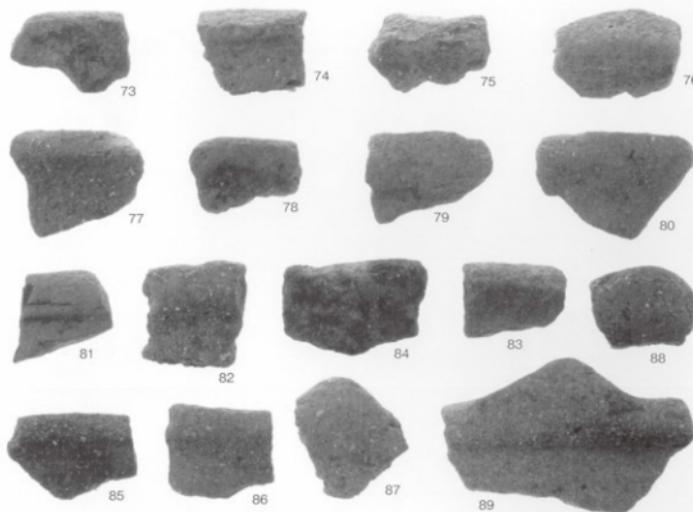
第2文化層出土土器（2）



第2文化層出土土器（3）

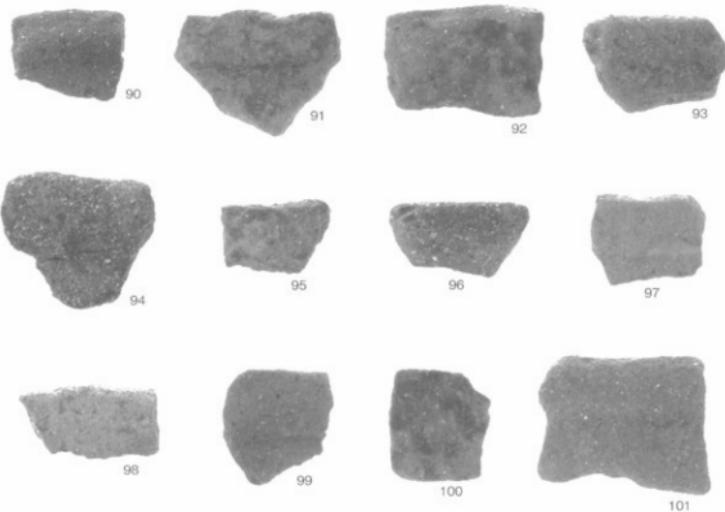


第 2 文化層出土土器 (4)

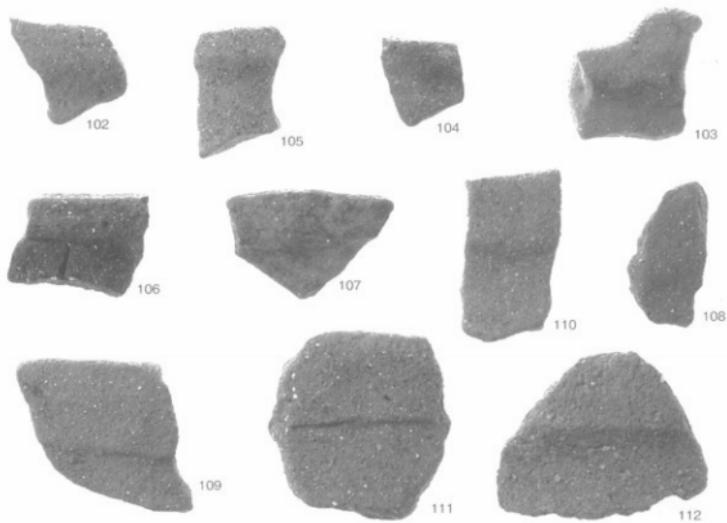


第 2 文化層出土土器 (5)

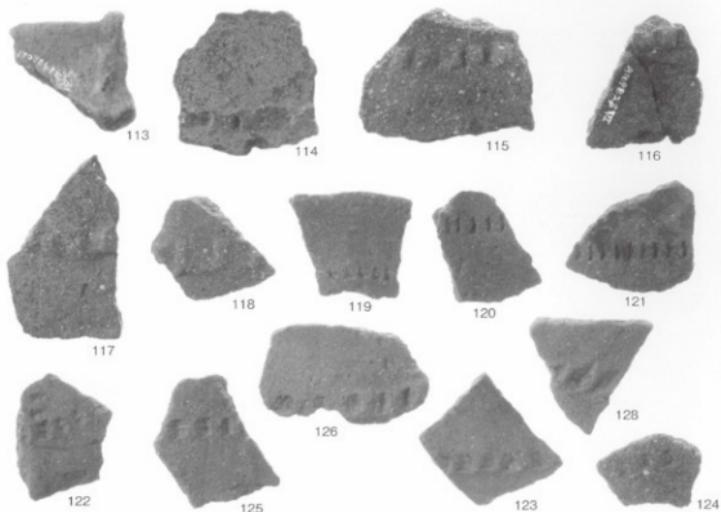
圖版 14



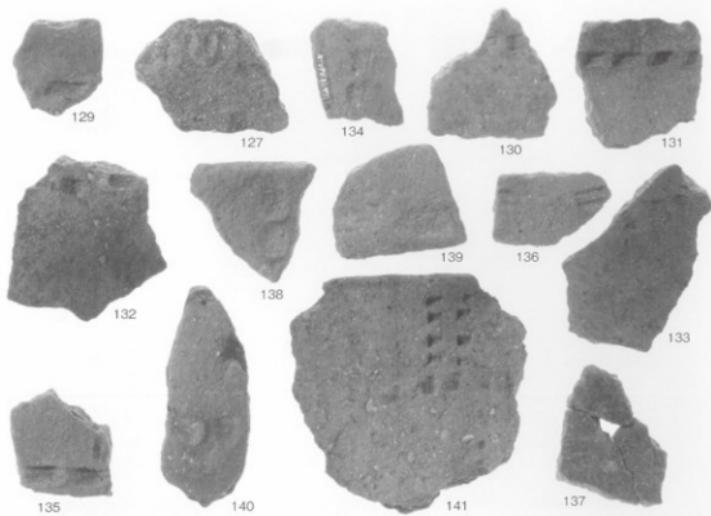
第 2 文化層出土土器 (6)



第 2 文化層出土土器 (7)

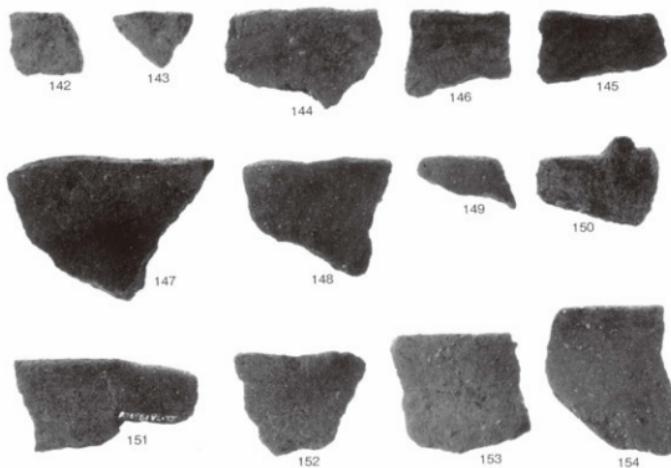


第2文化層出土土器（8）



第2文化層出土土器（9）

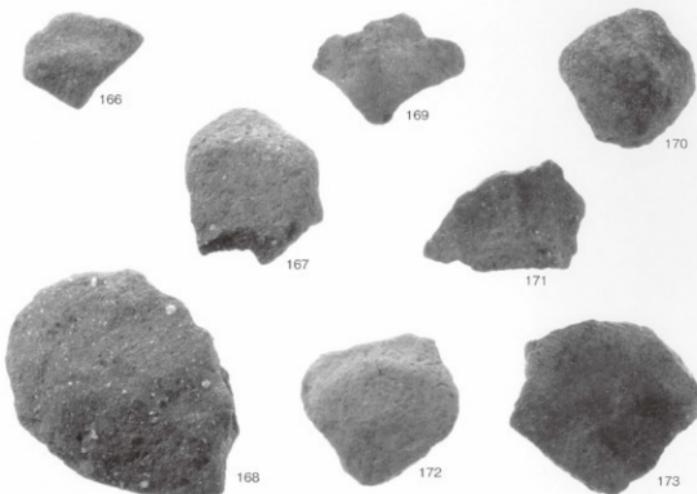
圖版 16



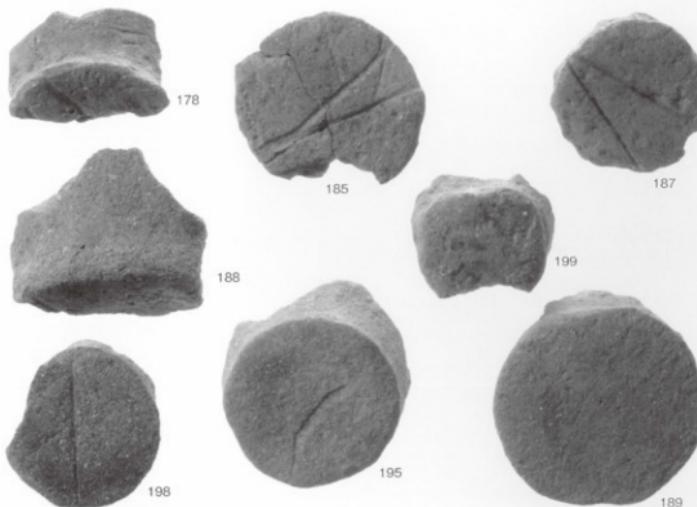
第 2 文化層出土土器 (10)



第 2 文化層出土土器 (11)

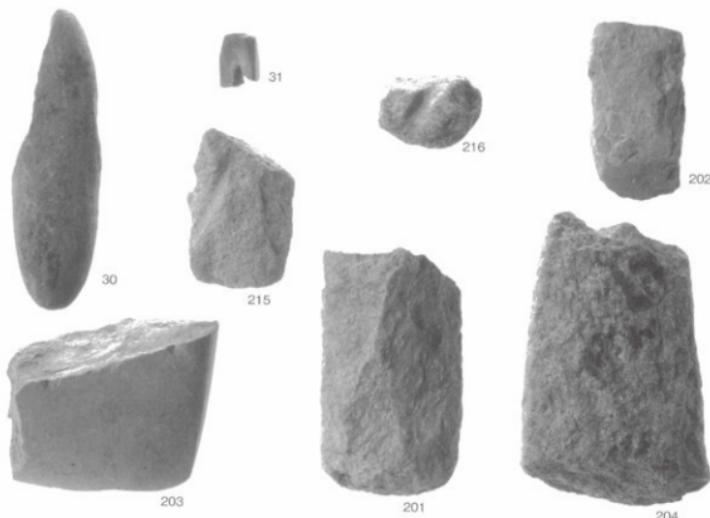


第 2 文化層出土土器 (12)

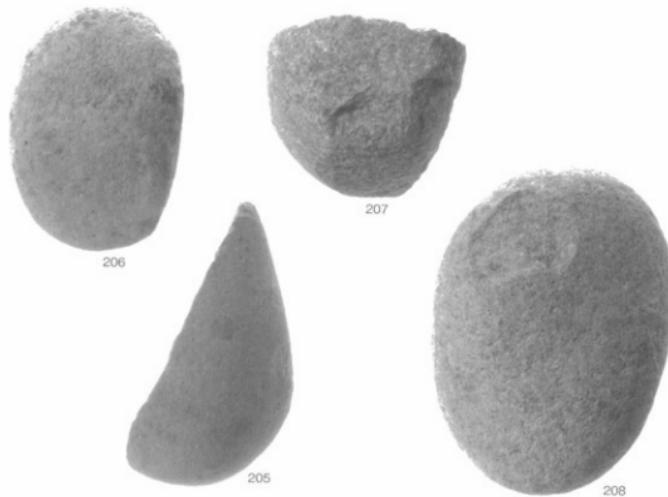


第 2 文化層出土土器 (13)

図版18



石器 (1)



石器 (2)



石器 (3)



石器 (4)

図版20

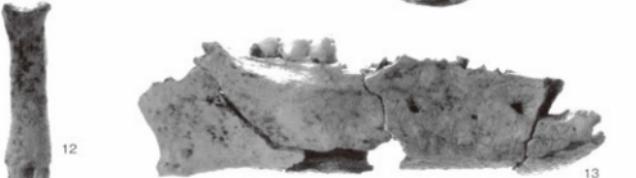


217



218

鉄製品



脊椎動物遺体

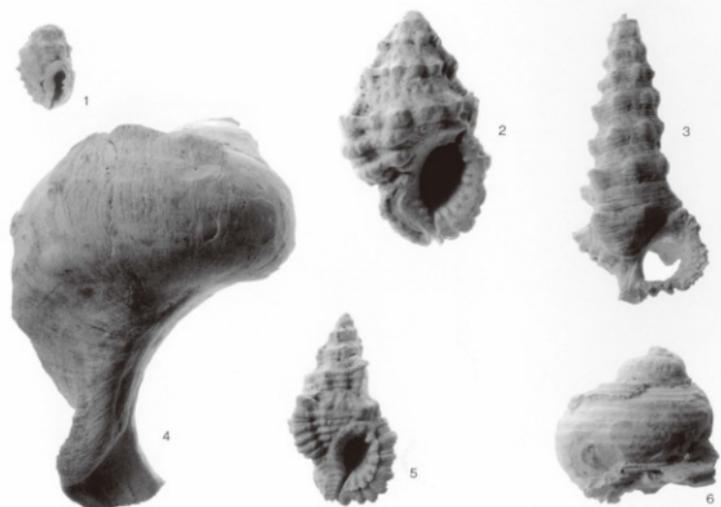
図版20 1. サメ類椎骨 2. アオブダイ歯骨 3. ブダイ科歯骨 4. ブダイ科前上顎骨 5. ニザダイ科鱗  
6. ベラ科上咽頭骨 R 7. ベラ科（タキベラ型）下咽頭骨 8. ハリセンボン上顎骨  
9. 10. 11. 12. 13. イノシシ

図版21上 1. シロレイシガイダマシ 2. オキニシ 3. オニノツノガイ 4. ヤコウガイ 5. ミツカドボラ  
6. チョウエンサザエ

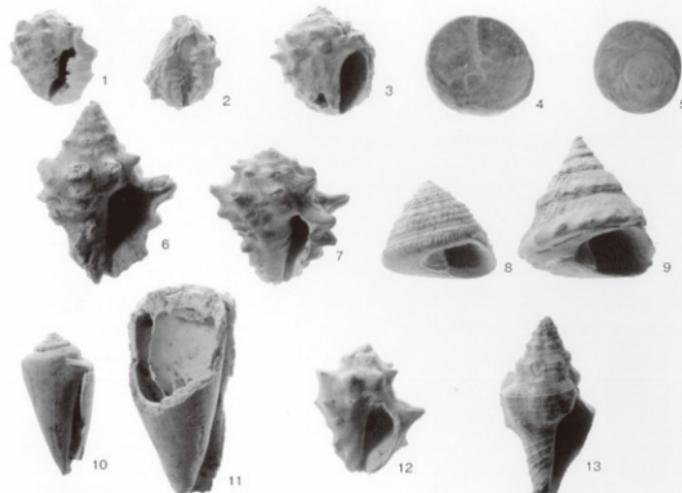
図版21下 1. キマライガレイシ 2. ムラサキイガレイシ 3. アカイガレイシ 4. ヤコウガイ（フタ）  
5. チョウセンサザエ（フタ） 6. シラクモガイ 7. コオニコブシ 8. ニシキウズガイ  
9. サラサバティイラ 10. マガキガイ 11. アンボンクロザメガイ 12. ツノレイシガイ  
13. リュウキュウツノマタガイ

図版22上 1. シラナミ 2. ヒレジャコ 3. シャゴウガイ

図版22下 1. マライモガイ 2. レイシガイダマシ 3. キイロイガレイシガイ 4. キイロダカラ  
5. ハナマルユキ 6. アマオブネ科 7. エラブマイマイ 8. オキノエラブギセル  
9. リュウキュウヒバリガイ 10. ヤクシマダカラ 11. ハチジョウダカラガイ 12. アラヌノメガイ  
13. リュウキュウマスオガイ



貝類遺体 (1)



貝類遺体 (2)

圖版22



貝類遺体 (3)



貝類遺体 (4)

知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

中山間地域総合整備事業

沖永良部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

**揚 殿 遺 跡**

発 行 日 2011年3月31日

編集・発行 知名町教育委員会

〒891-9295 鹿児島県大島郡知名町知名 307

印 刷 刷上印刷株式会社

〒891-0122 鹿児島県鹿児島市南栄 3-1-6



フローラル知名